見ても丁度よい戀人同志と見えるのに、まだ十三でおありになる陛下に奉仕される事を計つた自分を女王の方からも恨んでおいでにはなるまいかと、ふとそんなことも源氏の君は思つたが、今日になつて中止することの出來ることではないのであるからさりげなくして居た。大人の女御の來るのは耻しいと陛下は思つておいでになつたのであるが、小柄な若々しい、ものの柔かな、美しい王女御を御覧になつてなつかしい人だとおおもひになつた。弘徽殿の女御を陛下は早くからの馴染の內輪の戀しい人と思つておいでになつた。清涼殿へ夜の宿直にお召しになるのは、雙方同じ事にされたが、晝などおいでになるのは遊び友達のやうにも思つておいでになる弘徽殿の女御の御殿への方が多かつた。權中物言は后に立てる望を持つて女を女御に、したのが、源氏の君が親のやうになつて競爭者を宮中へ入れたのを腹立たしく思つて居た。院の陛下は女王の歌を御覧になつてからは猶更その人を

忘れられなく思つてお出でになる。源氏の君が院へ伺候した時、院は今度の齋宮が伊勢へ下向されたことなどから、その人を戀しいと思つて居たなどとはお云ひにならないが王女御が御自身の代の初めに伊勢へ行かれた時のことなどを忘られない樣子でお話しになつた。失つた戀の悲しみのお見えになるのを源氏の君は深くお氣の毒に思ふのであつた。それほどに美しいと院のお身にしんだ王女御のお顏は、どれ程の美しさなのか見たいものであると思ふのであつたが折がなかつた。こんなに二人の女御が同じやうに陛下の寵幸を得て居るのをお見になつて、兵部卿の宮は姬樣を女御にお出しになることが出來ないない樣に思つて控へてお出でになつた。陛下は何よりも繪畫に趣味を持つておいでになつた。お好きであるからお描きになることも誠にお上手であつた。王女御も繪をお書きになつたから、これがお心にかなつて以前に倍して御寵愛がある。お傍の男も繪のたしなみ

のある者をお好きになる程なのであるから綺麗な女御が繪筆を持つて首を傾けて紙にむかつて居る美しさがお心にしんで、またしてもお足は王女御の梅壺の御殿へ向くやうになつた。權中納言はそのことを聞いて、女の女御の所へ諸名家に描かせた繪を持つて行つた。珍しくお思ひになつて、

『梅壺の女御にも見せてやりたいから、彼方へ持つて行つても好いか。』

と陛下がお云ひになると、

『持つておいで遊ばしてはいけません、つまらないのですから。』

と云つて女御はそれをしまつてしまふ。こんなことが毎度あるのを源氏の君が聞いて、

『陛下をそんなにお惱しするなどと、權中納言は怪しからんことを女御にさせる。負ぎらひな人だ。』

と云つて笑つて居たが、

『私も古い繪などをいろいろ持つて居りますから、差しあげます。』

と梅壺においでになつた陛下にお云ひして、二條院の繪の戸棚を開けて紫の君と一緒に、どれがいいであらうと選るのであつた。旅から持つて歸つて來た箱も開けて、須磨明石の寫生の畫帖を出して、源氏の君は初めてこれを紫の君に見せた。

『何故今迄見せて下さらなかつたのでせう。』

と云つて繪を見ながら、紫の君はその時代の悲しかつたことを思ひ出して涙を零して居た。

『女院にだけはお目にかけたいと思つて居る。』

かう云つて源氏の君はその中から、須磨と明石の心持のよく現れたのを一帖づつ選つて居たが、明石の君を戀しいと思ふ思ひに胸をそそられるやうな氣がして居た。源氏の君が陛下に繪を奉ると聞いて、權中納言は厄鬼となつて好い繪を集めて居た。三月の初めであるから日

も長くはあるし、式日などもない暇な頃であるから、雙方のを繪合せにして勝敗を決める催しをするのも面白いことであらうと思つて、それからは源氏の君も一層熱心にその方に骨を折つて居た。繪卷物は、梅壺の王女御の方は古典的の文學から題を取つたものを書かせ、弘徽殿の女御の方では近代文學から材を選んだ繪を畫かせてあつた。花やかで心を引き附けるのはこの方が多いやうである。相當な學識のある女官を左右に分けて、梅壺の方には平典侍、侍從の內侍、少將の命婦が附き、弘徽殿の方には大貳の典侍、中將の命婦、兵衞の命婦が附いて批判をし合つた。繪その物よりも古典的文學の價値、近代的文學の價値を爭ふやうなことになつたが、女院は伊勢物語が好いと云ふ古典派の味方であつた。若い女達が死ぬ程見たいと思つて居る陛下や王女御のお筆の繪はまだ席上に顯れない。源氏の君はこの會をもう一層大きくして批評を男にさせやうと發議した。さう決めて勝敗は日を改め

て定めることになつた。そんなこともあらうかと思つて、梅壺の方では勝れた繪をまだ餘り出さなかつたのである。その中へ須磨明石の繪も源氏の君は交ぜて置かせた。權中納言も家へ畫師を伴れて來てまた新に繪を秘密にして描かせて居た。院の陛下もこんな催があるとお聞きになつて、王女御に繪をお贈りになつた。昔の朝廷の年中行事のいろいろを古名匠が描いて帝王が讚をされたものと、御自身の代にあつたことを繪にされたものとであつたが、齋宮の下向の時の大極殿の儀式は御一生のうちで一番深い印象を受けてお出でになるのであるから、繪の描きやう配置を一々巨勢公茂にお教へになつてお描かせになつたのである。左近の中將が使になつてこれを持つて來た。大極殿に齋宮のお乘りになつた輿のある神々しい處に、

心のみとこ新しく悲しみぬそのかみに似ぬわが身なれども

と云ふ歌が書いてあつた。王女御は昔その日に挿した簪の端を少し

折つて、それに、

　なつかしさ唯この今のここちしぬ思ひしむには古もなし

と書いて青い紙に包んでお上げになつた。これを御覽になつた院のお胸は苦しくなつて、もう一度位に歸つて見たいと云ふやうな思ひもおしになつた。源氏の君を恨めしいともお思ひになつた。院のお描きになつた繪は皇太后のお手から姪の弘徽殿の女御の方へも澤山行つた。尙侍もその方の趣味の深い人であるから、いろいろと集めて弘徽殿の女御に贈るのであつた。批判の任に當つたのは陛下の兄君の太宰の帥の宮である。多くの繪が雙方から出された最後に、須磨明石の繪が出たので右方は周章てた。源氏の君の樣な上手な人が靜に描いて置いた寫生の繪は、見る人の心が遠くぼうつとなるやうであつて、終には淚をさへ流させた。左が勝になつて夜が明けて來た。

「あなたは學問は別として、一番お得意なのは一絃琴をお彈きになる

こと、それからは横笛、琵琶、十三絃の琴と云ふ順にお上手だとお崩れになつた陛下が云つておいでになりましたが、繪などはこんなにお描きになるとも誰も知らなかつたでせう。」と帥の宮はお云ひになつて、源氏の君の顏を見て少しお醉泣をしておいでになつた。須磨明石の繪は女院のお手許へ改めて源氏の君は差し上げた。この前後の帖が見たいと女院は云つてお出でになる。この繪合に限らず源氏の君が强大な後援者になつて、萬事自分の女を梅壺の女御に押へさせようと思ふのであらうと、負けた權中納言は口惜しく思ふのであつたが陛下が弘徽殿の女御をお思ひになる御愛情の深いのを知つて居る心では、未來を樂觀せぬでもなかつた。源氏の君はこの頃佛堂を嵯峨に建てて居る。

松風

源氏の君は出來上つた東の院へ花散里の君をむかへた。それは西御殿一體の座敷と、正殿へ行く廊下添ひの細座敷などの廣い間で家來の詰所や事務室なども
ある。源氏の君の正妻の一人としての體面を十分保たせた設備がしてある。東御殿は明石の君を迎へて住ます所にしようと源氏の君は思つて居る。北御殿は特に廣く拵へさせていくつにも座敷廻りが爲切られてある。それは源氏の君の愛人であつて、たとへ妻とは云はれないでも、何時までもこの人を頼りにして行かうと思つて居るやうな人達を集めて置かうと云ふ源氏の君の思惑であ

つた。正殿は此處へ來た時の源氏の君の居所になるのであらう。明石へは始終音信が絶えない。何時の手紙にも必ず出京が促してある。自身などとは身分の違つた立派な女も、源氏の君の深い愛を得ることが出來ず、また捨ててしまはれもしない位置に立つて、少からぬ苦勞をして居ることを聞いて居る明石の君は、その中へ源氏の君の愛をどれほど贏ち得る自信もない自分が出て行くのはこの上もない無謀なことであらうとも思つて一方では上京を斷念して居るのであるが、生んだ子が田舍で育つたために源氏の君の子の中にも入れられないやうなことになるのも忍ばれないことであると思ふと、さうもならない氣がして悶えてばかり居た。親達も女の思つて居ることが道理であると云つて歎いて居るのを見ると一層女は溜らなく心を苦しめた。母方の曾祖父に當る中務卿の宮の別莊が嵯峨の大井川の傍にあつて、まだ誰の手にも渡つて居ない。宮家の相續人も皆死に絶えた今は當然

それは明石の入道の妻の所有になつて居るのであるが、有福なこの家ではそれをどうしようとも思はないで今迄捨ててあつた。思ひ出して以前から別莊守のやうになつて住んで居る男を入道の妻は明石へ呼んだ。

『もう私達は京へ歸らない積りで居たのですが、女を京の方と緣を組ませなどしたものだから、是非彼方に家を一つ持たなければならないことになつたのです。さうかと云つて急に都會の眞中へ行くのも厭なものですから、嵯峨の方へ一先落附かうと思ふのですが、あなたの住んで居るのに必要な處だけは貸して置いても好いのだから座敷の方を急に繕はせて貰へないでせうか。』

『お持主が分らないやうなことになつて座敷なんかは隨分ひどくなつて居るものですから、下廻りの者の居る處だけを私の方の手で修繕してやつと住んで居ますが、この春頃から源氏の内大臣が寺を近

くへ建ててお出でになつて、その外にも寺だの別莊などがいつぱい出來て嵯峨へ人が澤山來るやうになりましたから、閑靜なお住居をなされたいと云ふ御注文にはどうですか。』

とその男は云ふ。

『源氏の內大臣とは緣續きになつて居るのですから、そのお寺へ近いのは丁度都合が好いのです。家の中のことなどは移つてから追々よくして行つても好いのですが、座敷の建替だの繕ひだのに至急にとり掛るやうに計つて下さい。』

『私のものになつた家と云ふのではないのですが、俺が持主だと云つて修繕する金を出す人もないものですから、そんなことで私が一寸大工を入れたりして住んで居るのですが、あの家に附いた田地と云ふものがありますが、それはあなたの叔父さんの民部大輔さんに相當なお禮をお上げして私が頂いたのです。』

と慾の深さうな目を見張つて云ふ。

『田地なんかは私の方ではいらないのです。今迄通り家の見廻りなどして、あなたの居た所にそのまま住んで居て貰ひませう。家の證書なんかは私の方にあるのですが其處の世話をして居る暇がなかつたのです。あなたに上げる給料なんかも長く拂ふ人がなかつたでせうが、精算して私の方から上げることにしませう。』

と入道の妻は云つた。自身が橫領すれば出來るのだがとその男は思ひながら、その家と源氏の君とが關係のあるらしい言葉に少なからず怖氣もついて入道から十分の金を引き出してそれから普請にかかつた。こんな用意があるとも知らない源氏の君は明石の君が京へ行かうと云はないのを少し怒つて居たが、大井の家が出來上つてから、こんな所がありましたから、其處へ行く積りで居りますと云つて來た手紙を見て賢い爲方だと感心して居た。源氏の君の內密事には何に限ら

ず昔から與つて居る惟光は、また源氏の君の意を受けて不都合がないか大井の家を見に行つた。

『大變景色の好い處で、川の傍にありますので、明石のお家から海を見て居た時と同じやうな氣が致しました。』

と惟光は歸つて來て云つて居た。源氏の君の造らせた寺は大覺寺の南の方であつて、瀧の傍の座敷などは大覺寺のそれよりも趣があつた。明石の君の家は松の木の澤山ある中に建つてある。室内の裝飾などは源氏の君の方からさせた。そして迎への者をだれにも知られないやうにして明石へ遣つた。住みなれた處を捨てて行くと云ふことが苦痛であるのに、その上父の入道を一人殘して置くのであるから明石の君は悲しがつて居る。源氏の君に迎へられて京へ上ると云ふやうなことは昔から入道が寢ても覺めても願つて居たことがかなつたことなのであるから嬉しくはあるが、女が傍に居なくなること、孫の世話

が出來ぬことなどが悲しくて、

『小い姫さんを見ないで私が生きて居られるだらうかね。』

と同じことを毎日云つて居た。母親も可愛さうである。良人が出家してからは一つの處に居るのでもないから、今度は無論女に從いて京へ行くのであるが、入道の頑固な氣質には困つて居ながらも、生れた京を出てこの明石で二人は死ぬ因緣だと周圍の寂しい中で慰め合つて居た人なのであるから、俄に別れるのが心細くて泣いて居る。秋であるから一層誰の心もしめつぽい。いよいよ立つと云ふ日の夜明に明石の君はなつかしい海を眺めて涙を零して居た。入道は後夜から佛前で泣きながら看經をして居た。孫の傍へ來て、

『俺のやうな年寄の坊主を祖父だと思つてまつはしてくれる可愛いこの孫に別れて、俺はこの先どうして暮して行かうと思つて居るのだらう。』

と云つて、零れて來る涙を勉めて隱さうと入道はして居た。

『京と云つたつて一人歸るのですから私の心はどんなに寂しいでせう。』

と云つて妻の泣くのを入道は道理だと思つて居る。京を出た時のうら若い昔を思つて尼姿を憐むやうに入道はぢつと見て居た。

『送つただけでもお父樣が來て下すつたら、ねえ、お母樣。』

と明石の君が云ふと、

『そんなことはよくない。』

と入道は打ち消して居たが、途中のことが氣に掛らないでもないらしい。

『私は播磨守をやめた時、京へ歸らうとも思つたが、それきり發展することも出來ないで、地方官の古手だと後指を差されて居るやうなことでは親の名にも係ることではないかと氣が附いて出家してここ

に永住することに決めたのだ。それだものだから私が前に京を暇乞して出たのは浮世と別れる長い暇乞だつたのだなどと知人も皆云つて居たさうだが、功名心などと云ふものは自分ながらも思ひ切りよく捨てたものだと思ふ程だつたのが、あなたが少し大きくなつてくるに隨つて親の偏狹な心から暗闇に玉を置いて置くやうな無慘な運命を造つたと、始終私は我身を責めて、あらゆる神や佛にあなたの幸を祈つて居た。さうして居るうちに思ひ掛けなく源氏の君とあなたの緣が結ばれたので、嬉しいことだと思つて居ても身分の釣合はないために云ふに云へない氣苦勞をばかりして居た。然し可愛い姫さんまでも出來たのだから、あなたの幸運の道はもう安全に開けたものだと思ふから別れにくい別れをあなたとする。あなたは私のことなどは一切忘れるやうにしてお暮しなさい。私の方からも何も云つて上げない。私が死んだと聞いてもあまり歎かな

いで居て下さい。』

と入道は女に決然としたことを云ひながら、また、姫さんのことを佛樣に

『さうは云つても私は死ぬ日まで未練らしくお願ひしてばかり居るのだらう。』

と云つて居た。船は八時頃にこの浦を出た。順風で豫定通りの時間で京へ着いたが、目立たぬやうにそつと大井の家へ入つた。家の造りも明石の君の氣に入つた。明石の浦に居るのと何となくよく似た此處の住居であるから所を變へたやうにも思はない。新しく建て加へた座敷なども趣がある。庭へ引いてある水の流れなども面白い。源氏の君は親しい家來を出張らせて新來の人に饗應をさせた。其處へ行く口實に困つてどうしようかかうしようかと紫の君へ氣がねして思つて居るうちに日が經つて行く。直ぐにも逢へることと思つた戀人がかうなのであるから女は却つて物思ひが加はつた樣な形で、なつ

かしい古郷をばかり思つて居た。源氏の君のかたみの琴を奥の座敷へ入つて彈いたりなどして居た。

かなしくも一人歸れる山里に聞きしに似たる松の風吹く

これは尼樣の詠んだ歌である。源氏の君は餘りの逢ひたさに、このためにどんなことが起らうとも好いと云ふ氣になつて、いよいよ大井へ行かうとした。

『桂村に建てさせた別莊へ私か行つて指圖してやらなければならぬこともあるし、私が訪ねてやる約束をした人もその傍に居るから其處へ行つたり、また嵯峨の寺の方へも廻つたりするから二三日歸りません。』

と源氏の君は紫の君に云つた。くはしい事は知らないが桂の院と云ふ處を造へて其處へ明石の君を呼び寄せて住ませてあるのであらうと紫の君は妬ましく思つた。

『歸ることなんかお忘れになつて長く行つておいでになるのでせうから、どんなに待遠しく私は思ふでせう。』

『またそんなことをあなたは云ふ。あなたと一緒になつてから私と云ふ者がまるで變つてしまつたと世間では云つてますよ。私程忠實な良人はありはしないのに、一寸したことを大層なことのやうに恨んだりしますね。』

こんなことを云つて紫の君の機嫌を取つて居るうちに大分遲くなつて、大井の家へ源氏の君の着いたのは夕方であつた。小い姫さんを見て、こんな人を今迄見ないで居たかと思つて源氏の君は涙を零して居た。葵の君の生んだ若君を美しいと云つて世間で賞めはやして居るのは關白の孫と云ふ特別なことが光になるからでもあらう、これは自分の目で見てもうひとりとない美しい子だと源氏の君はおもつて可愛がつた。旅住居に窶れて居た時ですらも見たこともない秀麗な

男だと女は思つたのであるから、花やかな姿をした今の源氏の君の輝くやうな顏を見ては、長い間の心の暗い影も一時に消えてしまふやうであつた。立つて行く頃は容貌などの衰へて居た乳母も綺麗な若い女にまたなつて馴々しく明石の話などをする。

『よく辛抱をして居たね。』

と源氏の君は喜ばしさうに乳母に云つて居た。

『此處は餘り遠すぎるからね、來ようと思つてもつい大層になつて來られなくなるから、あなたのために造へて置いた東の院の方へ來てはどうです。』

と源氏の君が云ふと、

『此處に居て少し京の勝手になれてから參りませう。』

と明石の君は云つて居た。翌日は桂の院へ源氏の君が來ると聞いて近邊の領地の者などが出て來て、其處からまた此處へ來た。源氏の君

はそんな者などに云ひつけて庭などをよく繕はせなどして居た。

『少し手をさへ入れたならどんなにでも好くなる庭だけれど、そんなにしては此處から外へ移つて行くのが厭になつて、後まで氣が殘るから。私もそんなのだつた、明石は。』

などと昔のことも源氏の君は語つた。東の廊下の下を潜つて出る流のあんばいを好くさせると云つて下男に指圖して居た縁側に閼伽桶などの置いてあるのを見て、

『おかあさんは此處の座敷にお出でなんですか。氣が附かないで失禮な風をして居ました。』

と云つて早速源氏の君は上へ直衣などを着た。

『あなた方のお蔭で子供が大きくなりました。それに私がお願ひしたのでお住心地の好い處を捨てて此方へお越し下すつたことも濟まないと思つて居ます。お父さんはお父さんでお寂しく暮しておお

出でなんでせう。お詫びしなければならないことばかりです。』

『私どもの苦勞は先から先からあなた樣がお察し下さるので喜んで居ります。』

と云つた尼樣は嬉しさうであつた。

『お姫さんもどうなりますことかとお案じして居りましたが、もうお父樣のお手にお歸つたやうなものですから安心で御座います。唯お生みした母が人樣並の身分で御座いませんことが御運の障りにならないかとそんなことを思つて居ります。』

とまた云つた。物越しの上品な人である。源氏の君も打ち解けて昔この家に居られた親王のことなどを話し合つた。それから源氏の君は寺の方へ一寸行つて、また此處へ歸つて來た頃には好い月夜になつて居た。月を眺めて昔のことが悲しく胸の中を往來する時、女は默つてかたみの琴を源氏の君の前に置いた。

『同じ音がするでせう。ねえ、少しも變らないでせう。それでもあなたは疑つたでせう。』

と琴を彈いた後で源氏の君は云つた。

『變らないと云ふお約束を眞實だと思つて居ればこそ來たのですわ。』

かう云つて居る女の樣子がふさはしく源氏の君に見えるのは、この人の容貌の德とでも云はねばなるまい。源氏の君は姬さんを何時迄見ても見飽かないやうに眺めてばかり居た。日蔭者で大きくなるのが愍然でならない。二條院へ伴れて行つて紫の君の子にして育てたなら、それだけでも世間の思わくが違ふかも知れない、さうしたいものだと思ふのであつたが、引き離すなどと云ふことが云ひ出せるものでないとも思つた。姬さんは初めは耻しがつて居たが、今日はもう馴れて物を云つたり笑つて見せたりする。抱かれてもぢつとして居る。そ

のまた翌朝は少し朝寢して此處から直ぐ立つて歸る筈であつたが、京から桂の院へ源氏の君の後を追つて大勢客が來て居て源氏の君は是非其方へ行かねばならなくなつた。迎へのためにこの家へ來た人などもある。源氏の君は少し面目ないやうにも思つた。出て行かうとすると乳母が姬さんを抱いて來た。源氏の君は子の髮を撫でながら、

『遠いからお父樣は始終見らないね。』

と云つて居ると、

『とてもお目に懸れませんでした時よりも、此方へまゐつてお逢ひが出來ませんやうでは却つて氣苦勢は多う御座いませう。』

と乳母は女主人のことをそれとなく云つた。

『奥樣はなぜ此處まで出て來ないのだ。別れを惜んででもくれないと私は人心地もつかない。』

かう源氏の君が云つたのを、乳母はわらひながら明石の君に云ひに行

つた。すすめられて見送りに來た女の品のある美しさは何々内親王と云つても好いやうに見えた。源氏の君の立つた跡へ太刀をもらひに來たのは明石へ來て居た前の右近將監である、明石の君が此處に居るらしいのを見て、緣側へ手を突いて、

『以前御厄介になりました右近將監で御座います。此方へおいでになりましたことは承知して居りましたが、折が御座いませんでお伺ひもいたしませんでした。』

と云つた。

『知つた方のあまりない處へ來たのですから前のお馴染の方は賴もしく思ひます。』

『また改めて。』

と云つて立つた。心の中では、女は何處まで出世するか知れないものだなどと思つて居た。

『皆今朝暗いうちに京を出て參つたのです。草花は丁度見頃ですが嵐山の紅葉は少し早いやうですな。』

『連中の中で鷹狩を初めた者もあります。』

と一緒に車に乘つた人達が源氏の君に云つて居た。

『一日ゆつくり遊んで行き給へ。』

その人達にかう云つて源氏の君は俄に桂の院で饗應の支度などを家來にさせた。狩好の若い人達は云ひ訣ほどの小鳥を萩の枝などに附けて歸つて來た。晝の間は詩を作りなどして居たが、夜になつてからは多勢で管絃の合奏などをして遊んだ。大分更けてからまた四五人の若い官吏が來た。源氏の君が桂に行つて居ることを今夜お聞きになつた陛下の、

秋の夜の桂の里をながめつつ心足るべしもち月のごと

うらやましとお書きになつたお文を持つて來たのである。勅使に出

す贈物などが用意してなかつたので、そんなものがあつたらと云つて大井の家へ取りにやると、彼方からはこの中にお間に逢ふものがあつたらと云つていつぱい詰めた衣櫃を二掛も遣した。

久方の光に近き名のみして朝夕霧もはれぬ山里

源氏の君のお返しの歌はこんなのである。そのうち此處へ行幸を仰がうと源氏の君は思つて居た。翌朝桂の院を立つて行く一行の賑かな笑聲などが風に交つて聞えるのを明石の君は寂しい心持で聞いて居た。二條院へ歸つた源氏の君は別莊のことや寺のことばかりをいろいろと紫の君に話した。

『二日で歸らうと思つたのが三日にもなつたのであなたに濟まないとばかり思つて居た。大勢そんな人達が來て酒を飮んだり大騷ぎをするものだからよく寢ることも出來なかつた。』

と云つて、源氏の君は紫の君の機嫌の惡いのに氣が附かないやうな振

りをして晝寢をして居た。

『あなたはまだ怒つて居るの、あなたの競爭者でも何でもないつまらない女ではありませんか。自分はえらい者だとずつと心を高くお持ちなさいよ。』

またこんなことも源氏の君は云つて居た。夕方になつて參內する前に源氏の君が隱れるやうにして手紙を書いて、家來に耳打ちして持たせてやつたのを見て、

『氣の多い方。』

『餘程お氣に入つた方と見えますね。』

など女達は云つて憎がつて居た。その晩は宮中でお泊りする方が好いのであるが紫の君の機嫌の直つてなかつたのが氣になつて歸つて來た。其處へ使が明石の君の返事を持つて來たので、隱すことも出來ずに紫の君の傍で源氏の君はその文を讀んだ。別段見ても腹の立

つやうなこともないので、

『破つてしまつて下さい女の手紙なんかを其處らへ散して置くのはもう似合はない年になつた。』

と云つて其處へ置いた。心の中では戀しくて戀しくて堪らなく思つて居る。物も云はないで脇息にもたれたまゝぢつと灯を見て居た。風で廣がる文を見ようとも紫の君のしないのを、

『見ないやうにして見て居るのは人が惡い。』

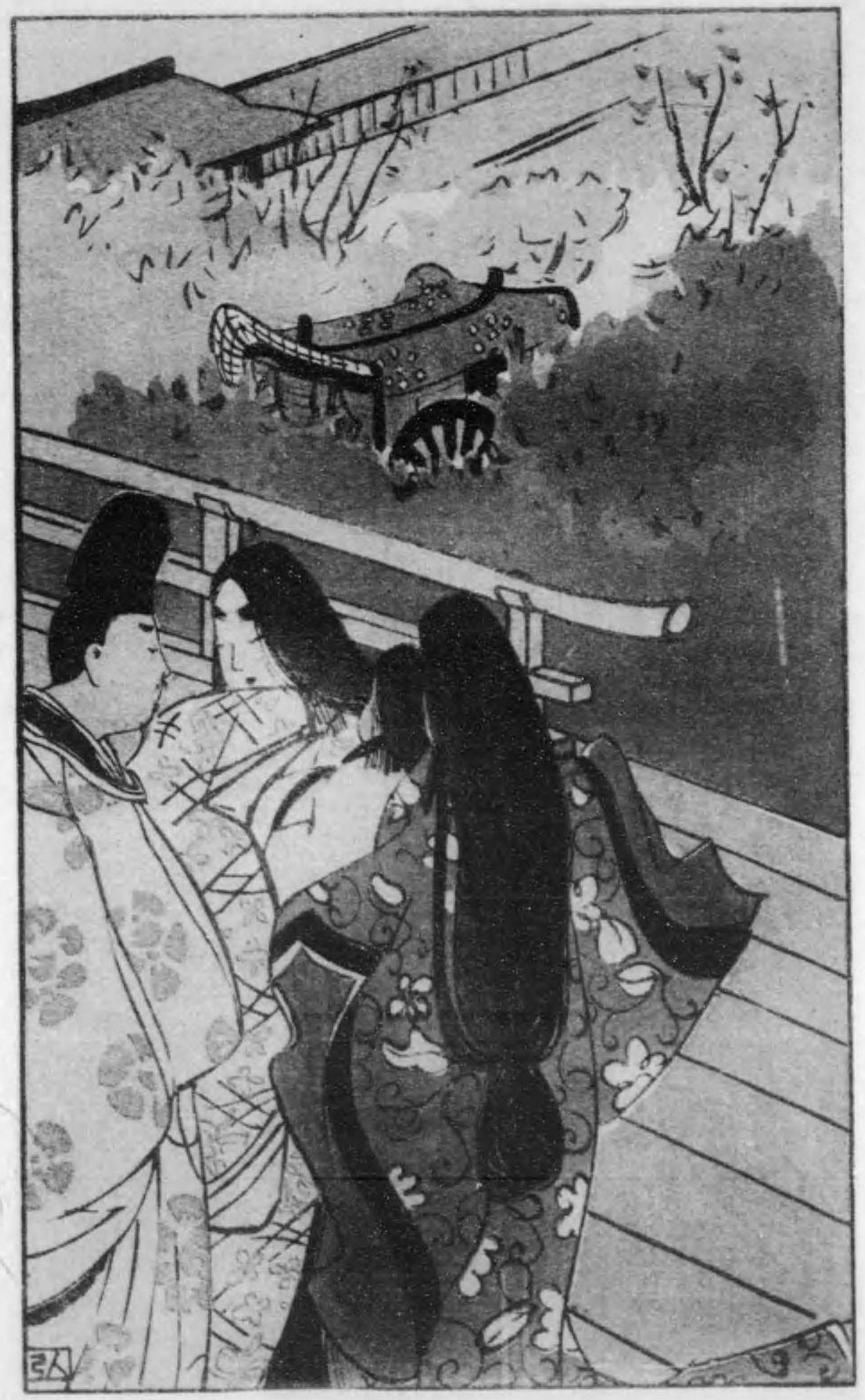
かう云つて源氏の君は笑つて見せた。そして傍へ寄つて、

『眞實はね、可愛らしい者を見て來たので、どうしようかと思つて居るんです。あなたも一緒に考へて下さい。育ててやる氣はありませんか。四つになつて居るのです。憎いと思はないのならさうなると一番好いが。』

と云つた。

『人のことを憎むだらうと直ぐあなたは仰しやるから、私は默つて居るのです。私は子供のやうな人ですから小い人の相手にはなれるでせう。眞實に可愛くなつていらつしやるのでせうね。』

紫の君はにこやかな顏をして云つた。大の子供好であるから、此處へさうして引き取らうかなどと源氏の君は思ふのであつたが、また明石の君の心持も察せられて、さう決めて畢ふことも出來なかつた。毎月十四と五の日には嵯峨の寺で念佛があるので、それをかこつけに大井の家へ行くのであるが何時も待遠しくてならない。



薄雲

冬になるに隨つて河に近い大井の住居は堪へられないほど寂しくなつて來た。立木や建築物にひどく當る風を聞いて心が始終落ち附かない。

『これでは住んで居られないだらうから、思ひ切つて東の院へ移つて來たら好いでせう。』

と源氏の君は云ふのであつたが、近い所へ行つて月に一度二度より訪はれぬやうな事であつたなら、今よりも一層見じめなものであらうと云ふやうな氣のする明石の君は、

『もう少し辛抱して此處に居ます。』

と云つて居た。

『あなたが當分此處を動かないと云ふのなら、姫さんだけを二條院へ伴れて行つたらどうだらう。それに家のも姫さんのことを聞いて居るものだから、見たい見たいとばかり云つて居るのです。うちのに馴れさせて彼の子にさせてやつても好いだらうと思ふのだが。』

源氏の君がかう云つた時、女ははつと胸を騷がせた。源氏の君にその考のあることは以前から察せられて居たのであるが、いよいよ云ひ出されて見ると、同情の少い冷い心が恨めしい。

『立派なお母樣に育てゝお貰ひしましても、眞實は誰が生んだのだなどと却つて惡く云はれませうから。』

放さうとは明石の君は云はない。

『繼母に掛けるのはどうだらうと云ふやうな心配は決してしないでもいいのだ。長く添つて居るのだけれど、一人も子供が產れないのだからね、寂しがつて前齋宮などと云ふ大きい人を子にして、世話などして居る位だからね。この可愛らしい子を決して疎かにしたりする氣配はない。』

と云つて源氏の君はそれからいろいろと紫の君の好い性質を話しなどした。昔の源氏の君は誰が妻になつて修るのであらうと危ぶまれた人であつたのが、紫の君と一緒になつてからは生れ變つたやうな堅い人になつたと聞いたが、やつぱりそのひとにえらい處があるに違ひない。源氏の君がこんなに自身の口から云ふのでも知れて居る。そんな人と愛を爭ふことも出來る自分ではないのに、表向の妻の一人だと云つてその近傍へ行つて憎い女だとおもはれてもつまらない。自分はどんな目に逢つても好いとして、子供までが勢力のある繼母に憎

まれるやうなことになつては行末が可愛さうである。そんなことを思ふといつそ今のうちに其方へ遣つてしまつた方が好いかも知れぬと明石の君は思つた。それと一緒に始終氣にかかるであらう、寂しい時の慰めものがなくなつたらどうであらう、源氏の君が偶にでも出て來るのは子が可愛いからでもあらうから居なくなつては見向かれもしないやうになるであらうかなども思つて、それからは毎日くよくよと考へ込んでばかり居た。尼樣は賢い女であるから、

『見ることが出來なくおなりなのは、私達には苦しいことだらうけれど、まあ何を考へねばならないかと云ふと、姫さんのためと云ふことを考へなければならないのだからね。お父樣だつて一寸した根底でそんなことを仰しやるのぢやないとおもふ。人と云ふものは母親次第なのだからね。源氏の君のやうなあんなえらい方で、お父樣の御愛子でいらつしつたのでも、更衣腹だと云ふので天皇樣にもお

なりになれなかつたのだからね。まあその外の親王樣のお子大臣のお子と云つても、兄弟の中で母親の惡いお子は輕蔑されるのだからね。世間がさうだと父親の心もやつぱりさうなるからね。殊に源氏の君は幾人も立派な御身分の奧樣がおありになるのだから、そのうちに誰方かに女のお子が産れて御覧、このままだと姫さんは見じめなものになりますよ。袴着の式なんかもいくら立派にしてもこんな片田舍では見てくれる人も何もありはしない。それよりも二條院の奧さんの子にして貰つて、大切にされて居る話などを聞くのを樂みにして居る方が好いだらう。』

と女を諭すのである。占ひをさせても二條院へ行く方が好いと云ふので明石の君は當惑して居た。源氏の君も無論さうしたいと思ふのであるが、女の心中が思ひ遣られないこともないから強ひてすすめない。袴着の式はどうするかと訊いてやつた返事に、

何ごともかひなき母のかげにあることの行末かけていとほしく候へば、かねて仰せ給ひしやうに御はからひ給はり候ことを祈り候。ひなびしさまの子のきらやかなる御處にまじり候はんことに唯心おかれ申し候。

と云つて來た。この心をしほらしく源氏の君は思つた。善い日などを暦で選つて、來た時の用意などを二條院ではさせて居た。辛いこと悲しいことと思ふが、子のためと思つて明石の君は忍んで居た。友達のやうにして貰つて居た乳母はこの人と別れて知らぬ人の中へ行くのを歎いて居た。十二月になつて雪や霰が毎日のやうに降る。澤山に積つた庭の雪景色を見ながら零れる涙を拭いて、

『眞實に手紙を始終頂戴よ。何時まで經つても變らないやうにね。』

と明石の君が云ふと、

『はい。』

と云つて乳母も泣いて居た。この雪が少し解けた時分に源氏の君が來た。何時もは待つてばかり居る人なのであるが、姫さんを迎へに來たのかと思ふと明石の君は味氣ない胸騷きがした。自分の心次第なのであるから、厭と云へば強ひてとも源氏の君の云はないのも知つて居るが、そんなことを云つて氣の決らない女だと思はれるのが耻しいと思ひ返して居た。この春から伸す髮が肩の邊でゆらゆらと動いて、美しい目をしたこの子を他人に子にしてしまふ母親の心の苦しさを思ひやつて、一晩中いろいろと源氏の君は慰めるのであつた。

『私は滿足して居るのですよ。』

と云ひながら忍び切れずに泣くのが源氏の君には憫然でならなかつた。お父樣に連れて行つて貰ふのだと行つて、姫さんは大喜びで、

『車に早く乘りませうよ。』

などと云つて居る。車の處まで母親が抱いて出た。

『母樣も早くお乘りなさい。』
と云つて姬さんは袖を引く。
『いつ母さんはまたあなたを見られるだらう。』
と云つて明石の君はわつと泣いた。苦い經驗を嘗めると源氏の君は思つた。乳母と少將と云ふ女が隨いて行つた。姬さんは途中で寢てしまつた。抱き下されても泣きなどはしなかつた。小い手道具などを置いて用意してある西座敷で菓子などを食べて居るうちに姬さんは母親の居ないのが氣になりだした。其處らを見廻して仕舞には恐いものに逢つたやうな目をして隅の方でぢつとして居た。源氏の君は紫の君と思ひ合つた夫婦の中へこんな可愛らしい子を伴れて來て、圓滿な家庭がいよいよ幸福の多いものになつたやうにも思ふのであるが、なぜ眞實にこの人の腹から生れて來なかつたのかと折々は思つてもかひのないことを思ふこともあつた。當分の間は母とか祖母と

か居ない人を戀しがつて泣くこともあつたが、心の穩かな子であるから案外早く紫の君に馴染んだ。紫の君は美しい寶物を手に入れたやうに思つて、抱いたり遊んでやつたりして嬉しがつて居る。もう一人乳母も雇ひ入れた。大井の方では明くれ戀しいにつけても、ことわることの出來なかつた自分の氣の弱さを後悔もして居た。尼さまもよく泣いて居るが姬さんが紫の君に可愛がられて居ることなどを聞いては喜ばずには居られなかつた。十分にしてそだてられて居る姬さんにその上着物などを拵へて送るのは失禮だと思つて、乳母や少將の着物だけを何かと氣を附けて送つて居た。子が其處に居なくなつたから來ないと思はれるのが辛さに、忙しい中でも勉めて源氏の君は大井を訪ねた。紫の君は今はもうそれほど妬しがりもしない。美しい子に免じたとでも云ふのであらう。東の院の花散里の君は、自身のことは云ふまでもなく女達や童の姿なども何時もきちんとさせて品よ

く暮して居る。近い德には暇のある時などはよく源氏の君が來て居た。泊つて行くなどと云ふ事は殆どない。自身はこれだけの運の女だと諦めて妬んだり恨んだりすることのない人であるから、源氏の君もこの人のために心を使つたりすることのないのを喜んで居た。そして紫の君に餘り落さない待遇をするから、下の者も侮るやうなことはしない。同じやうに源氏の君の家來達も出入して居る。源氏の君は正月で何かと事の多かつた日が少し經つてから、また明石の君に逢ひに行かうとした。殊に美くしい着物を着重ねて、薫物を袖に薫き籠めたりして出て行くのを紫の君はぢつと見て居た。後を追ふ姫さんに、

『父様は明日直ぐ歸つて來ますからね。』

などと源氏の君は云つて居た。紫の君は氣を更へて、姫さんを呼んで膝の上へ置いて、

『母様のお乳を上げませうね。』

こんなことを云つて戯れて居た。眞實のお母さんはどんなに思つて居るだらう、自分であつたなら戀しくて戀しくてならないだらうなどとも思ふのであつた。明石の入道もこれから後のことは一切知らないと云ふやうなことも云つたが、さうもならぬか始終人を遣つて京のたよりを聞いた。一月も源氏の君が見えないと聞いて膽を冷すこともある。また話を聞いて飛び立つやうに嬉しく思ふこともあつた。源氏の君の舅だつた關白が死んだ。六十七であつた。誰も誰も惜しがつて悲しんで居た。今年はこの外にも死ぬ人が續々あつた。彗星が出るなどとも云ふ。女院が春の初めから御病氣に懸つて居られたが三月になつてどつと重くおなりになつたから陛下が三條の宮へ行幸になつた。父帝にお別れになつた頃はまだ御幼年であつたから、それ程悲しいともお思ひにならなかつたのであるが、母女院に萬一のこ

とがあつたらと陛下の非常に心配して居られる御樣子が誰にも見えるので女院はお可愛さうにお思ひになつた。

『今年は私の年が惡い年に當つて居るのですから、早くからその用心をして祈禱などをさせたら好かつたのですけれど、私がそんなことをすると大騷ぎになるものですから捨てて置いたのですよ。參内して昔の話などをゆるりと申し上げたいと思つて居ながら、ついよくない續きなものでしたから。』

と切なさうな息をおしになりながら女院が云はれた。お年は今年三十七におなりになる。けれどその年よりもずつとお若々しいお姿であるのに、もう頼みのないもののやうに命を思つて居られるのが陛下にはお悲しい。この頃は方々で祈禱をさせておいでになるのであるが、惡いお年だと思ひながら御病氣をいつもあることのやうに思つて早くからその運びをしなかつたと陛下は殘念にお思ひになつた。陛

下のお身であらせられるから、ゆるりとお枕元においでになることも出來ないで、直ぐお歸りになるのであつたが、お心の中は傷ましい思ひで滿たされてお出でになつた。女院は御自身のことを始終滿足しておいでにならなかつたが、后腹の皇女に生れて后に立つて、陛下の御母になつたのであるから自分のやうなものこそ、人から云ふと最上の幸福な人かも知れぬなどとお思ひになるやうになつたが、源氏の君の子であらせられると云ふことを陛下が夢にもお知りにならないのを、その儘にして死ぬと云ふことだけが心の結ぼれがのこるやうに思つてお出でになつた。祈禱などにある限りの手を盡して居る源氏の君の心の悲しさ苦しさはまた一通りのものではない。今一度初戀の昔から云ひ盡されなかつたことをしみじみと話したいと思つて居たが、もう望のないことになつたとも思ふ。女達に御容體を聞くと、

『お弱いお身體で佛樣のお勤めを少しもお休みにならずに續けてお

いで遊ばしたものですから、段々お惡くなつてまゐつて、この頃では果物さへも召し上りません。』
と云つて、話して居る者は淚をそつと拭いた。
『陛下のおためになるやうにとばかりして居て下さいました何かの御恩返しをしたいと思つて居ましたが、そんなことも出來ずじまひになつてしまひました。』
と源氏の君に云へと取次のものに女院が敎へておいでになるのが少しづつ聞えて來るので、源氏の君は御返事も何も出來ないで泣いてしまつた。 間もなく女院は灯の消えるやうな靜かな往生をされた。百官が皆喪服を着た悲しい春である。二條院の庭の櫻を見ても源氏の君は女院の御全盛時代にあつた花の宴のことなどが思ひ出される。人に見られるのを憚かつて、一日持佛堂を出ないで泣いて居ることもあつた。 花やかな夕日がさして、木の枝などがはつきり繪に描いたや

うに見える上に、灰色の雲が漂つて居るのが哀な心によく合つて居るやうに思つて眺めて居た。

いにしへを戀ふる心につくるなく湧く思ひにも似たる雲かな

源氏の君はこんな歌を口誦んだ。女院の母后の時代からの祈禱僧であつて、社會からも尊敬を受けて居る人があつた、七十程の老年であるからもう山の寺に籠つて出ないと云つて居たのが女院が崩御なつたので京へ出て來た。陛下も信仰して居られる人であるから宮中へもお召になつた。そして昔のやうに陛下の御守護僧になれとの仰があつた。源氏の君もすすめるのでその人は老體を毎夜宮中へ運んで居た。ある日の曉、御前には外の人も居ない靜かな時である。老僧は陛下にいろいろなことをお話申し上げて居たが、
『誠に申し上げ憎いことで却つて陛下が私をお憎みになる樣な結果を見るかも知れないことで御座いますが、知つて居てお耳に入れな

いで死にましては、佛樣も私を腹黑な者だと思し召すかと思ふことが一つ御座いまして。』

とこんなことを云ひ出したが、後の言葉が久しく出ない。

『何なのだ。私は小い時からおまへを心安い者だと思つて居るのに、そんな隔てがましいことを云はれると嬉しくない。云つて御覽。』

『然し一大事なことで御座います。お崩れになつた陛下、女院また源氏の大臣のために却つてよろしくない事とも存じますが、思ひ切つて申し上げます。陛下が女院のお腹にお宿り遊ばした時から、女院には深い御心痛がお出來になつたやうで、しきりに御祈禱をおさせになつたことが御座います。源氏の大臣が寃罪で御處罰をお受けになつた時も非常にまたお恐がり遊ばして、そのときも私に祈禱を仰せ附けになりました。そのことを大臣がお聞きになつて一層烈しく祈禱をおさせになりまして、陛下がお位におつきになりますまで祈禱をおやめさせにならなかつたやうな事實も御座います。』

と云つて、それから老僧は女院と源氏の君との關係について、知つただけのことを陛下に申し上げた。陛下は餘りに意外なことをお聞きになつて恐しくも悲しくもさまざまにお心をお亂しになつた。お返事も遊ばさないのを見て、御不興なのかと老僧は恐れて退出しようとすると、

『まあ暫く。』

と陛下はお云ひになつた。

『よく云つてくれた。今迄云つてくれなかつたのが恨めしい程だ。おまへに聞くがまだ外にこのことを知つた人があるか。』

『それは王命婦と私の外には指の先程も知つたものは御座いません。それほど秘密だつたことで御座いますから、一層私が陛下に申し上げる責任があるやうにも存じたので御座います。尊貴な方が續い

ておかくれになつたり、彗星が出たりいたしますのもこのためでは御座いませんでせうか。御幼年であらせられた頃はそれでも濟んだので御座いませうが、陛下がお一人前にならせられたのに父君を父君とも御存じにならないでおいでになると云ふことが、神のお怒に觸れて居るかも知れぬと私は存じます。』

泣きながらこんなことを申し上げて居る間に夜がすつかり明けたので老僧は退出して行つた。思へば思ふ程この事を夢のやうに陛下はお思ひになるのであつた。故上皇のためにも濟まないことであるとお思ひになり、また源氏の君を父でありながら臣として仕へさせて置いたのが濟まないともさまざま御煩悶をされた。それから寢所へお入りになつたままその日は晝になつてもお出ましにならないと云ふことを聞いて、源氏の君は玉體にお障りがあるのではあるまいかと驚いて參內した。陛下は源氏の君のお顏を御覽になつて涙をお零しに、

なつた。源氏の君はまた女院のことを思ひ出しておいでになるのであらうとつて居た。この日は桃園の式部卿の宮がお薨れになつたと奏聞された。老僧の云つた神の怒りと云ふことをつくづくと陛下はお考へになつて居る。世間の物騒しい折であるから源氏の君は幾日も自邸へ歸らずに宮中に留まつて居た。

『位を譲つて私は氣樂な身になりたいとも思ふ。』

こんなことを陛下がお云ひになることもあつた。そんな時には源氏の君は極力お諫めをした。陛下も源氏の君も黑い同じやうな喪服を着て居られるために一層よくお似になつて見える。同じお顏を二つ置いたやうでもある。陛下は今迄も鏡を御覽になつては源氏の君によく似た顏であるとお思ひになることもあつたが、老僧の話をお聞きになつて以後は、さう思つて御覽になるせいか、御自身と寸分の違もないなどとお思ひになつて源氏の君を見て居られるのであつた。老僧

に聞いたことを云つて見たいとお思ひになるのであるが、若い陛下はお恥しくて口へお出しになることが出來なかつた。何によらず丁重にものをお云ひになる御樣子などが以前とは違ふので、心の敏い源氏の君は怪しい現象であると思つたが、そんなにくはしいことまでも陛下がお聞きになつたとは想像しなかつた。陛下は王命婦にもなほくはしく聞きたいとお思ひになつたが、女院が飽くまでも隱しておいでになつたことを、知つたとはあの人にも思はれまいとお思ひになつて、そのことは思ひ留つておいでになつた。唯源氏の君にだけはどうかして話したいと思つておいでになる。こんなことが外國の例にあるかと聞いて見たくもお思ひになつたが、それも云ひ憎いので、お一人であらゆる書物に目を通すことに勉めておいでになつた。皇子であつて人臣に列して、後に親王になつて即位されるやうなこともあるのをお知りになつた、陛下はさうして源氏の君を位につかせようかなどと

もお思ひになつた。秋季の官吏の交代期に太政大臣に源氏の君を任命しようと思ふと云ふ御內意をお傳へになつた序に、陛下はさうして後には位も讓りたく思ふと云ふやうなことをお漏しになつた。意外なことに源氏の君は暫くはお返事の言葉も出ない程であつたが、

『お崩れになりました陛下が、大勢の皇子の中で特に私を愛しておいでになりながら思召があつて位はお讓りにならなかつたので御座いますから、私は故陛下のお心通りにかうして居るのが本意で御座います。そのうち少し年をとりましたなら昔からの望み通りに出家したいと存じて居ります。』

とやつと申し上げた。陛下はお心がよく源氏の君に通らないのを殘念にお思ひになつた。太政大臣も辭退したので、陛下は位階だけを從一位にお進めになつた。親王になれとお云ひになるが、さうなれば關白をする人がない。權中納言は大納言になつて右大將を兼ねて居る

が、この人が大臣になる時が來たなら關白を讓つて、親王になることをお受けしても好いと源氏の君は思つて居た。併し陛下がこんなに立入つていろいろのことで自分のためにお心を遣はれるのは理由がなくてはならないと思つて、今は女官の中での隱居役のやうな閑散な職に居る王命婦を訪ねた。

『昔のことを女院のお口から少しでも陛下にお話しになつたやうなことがあるでせうか。』

『女院樣がお話しになつたと云ふやうなことは思ひも寄らぬことで御座います。陛下のお心に苦勞の種をお蒔きになるやうなことは斷じて遊ばさないで御座いませう。』

と云つて王命婦は首を振つて居た。それもさうであると思つて源氏の君は歸つて來た。梅壺の王女御は巨大な後援者のために後宮での勢力は並ぶ者がない。陛下の御寵愛も深厚なものである。王女御は

それに相當した美くしい人格を持つて居られるから、源氏の君はあらゆるお世話を快くした。秋になつてから暫く宮中を出て二條院へ歸つておいでになつた。草の花などの亂れて咲いた上に秋の雨がしとしと降つて居る景色の哀れなのを見て、死んだ戀人のことなどを思ひながら王女御の御殿へ源氏の君は來た。まだ喪服を放さない珠數を片手で持つた艶な姿で簾の中へ入つた。王女御は几帳だけを隔ててお逢ひになるのであつた。

『悲しいことの多い年であるのに、草花などだけは何時もの秋に變らないで咲いて居ます。』

と云つて柱にもたれておいでになる源氏の君の御樣子は繪に描いたやうである。昔のことなどを云つて、野の宮へ六條の君を訪ねて行つた時の悲しかつた別なども語つた。戀しい母君のことを源氏の君のお云ひになるので、しのびやかに女王の泣いておいでになるのが美し

い趣のあることに思はれて、身體を少しお動しになるのがなまめかしい柔かな響に聞える。まだ若い血の失せない源氏の君は胸騒ぎがしきりにする。

『戀と云ふもののために私はしないでも好い苦勞をどれだけしたか知れませんが、その中でも二つの重いものが未だに心からとれません。その一つはあなたのお母樣との戀です。私を恨めしい者だと思つたままでお死になつたのを始終殘念に思つて忘れられないのです。』

と源氏の君は云つた。もう一つのことは何であるとは云はなかつた。

『私が一時逆境に居ました頃いろいろと苦勞をさせた女達にも、それぞれ安心をさせることがこの頃になつて出來ました。東の院に居る家内なども隨分苦勞をした女ですが、この頃では心配は何もなくなつたと云つて居ます。私は位置や名望をとり返したことよりも

これが一ばん嬉しいのです。まあ戀の奴のやうなものですね。あなたをお世話申して居るのも權勢を張るためでも何でもない。』

こんなことを源氏の君が云つたのであるから返事のしやうがなくて王女御が默つておしまひになつたので、源氏の君も氣が附いて外のことに云ひまぎらせた。柔かに少しづつものをお云ひになる女王の御樣子が身にしんで、何時までも源氏の君は傍に居たい氣がした。日もとつぷりと暮れた。

『私はこの頃理想を實現した家を建てたいと思つて居るのです。春の庭秋の庭と云ふやうなものを拵へる積りですが、あなたは四季のうちで何時がお好きですか。』

と源氏の君は云つた。王女御はためらひながら、

『私は何だか秋が好きなので御座いますよ。』

とお云ひになる言葉の調子の愛らしさに、源氏の君は忍び切れずに、

『秋の身にしむやうな時がお好きなのだつたら、私の苦しい心にも同情が出來るでせう。どんなに長い間の片戀でしたか。』

こんなことを云つた。王女御がこれにお答へになる筈もない。源氏の君はまだそれから苦悶の大きかつたことなどを話するのであつた。氣の上つた儘に几帳の中へ入ることも爲かねなかつたのであるが、王女御が悲しんでお出でになる樣子を見ると道理であるとも思はれ、理性で判斷をすればあるまじき事だとも考へられたので、心も姿もしほしほとして居た。少しづつ身體を引いて王女御は奥の方へお入りになつた。

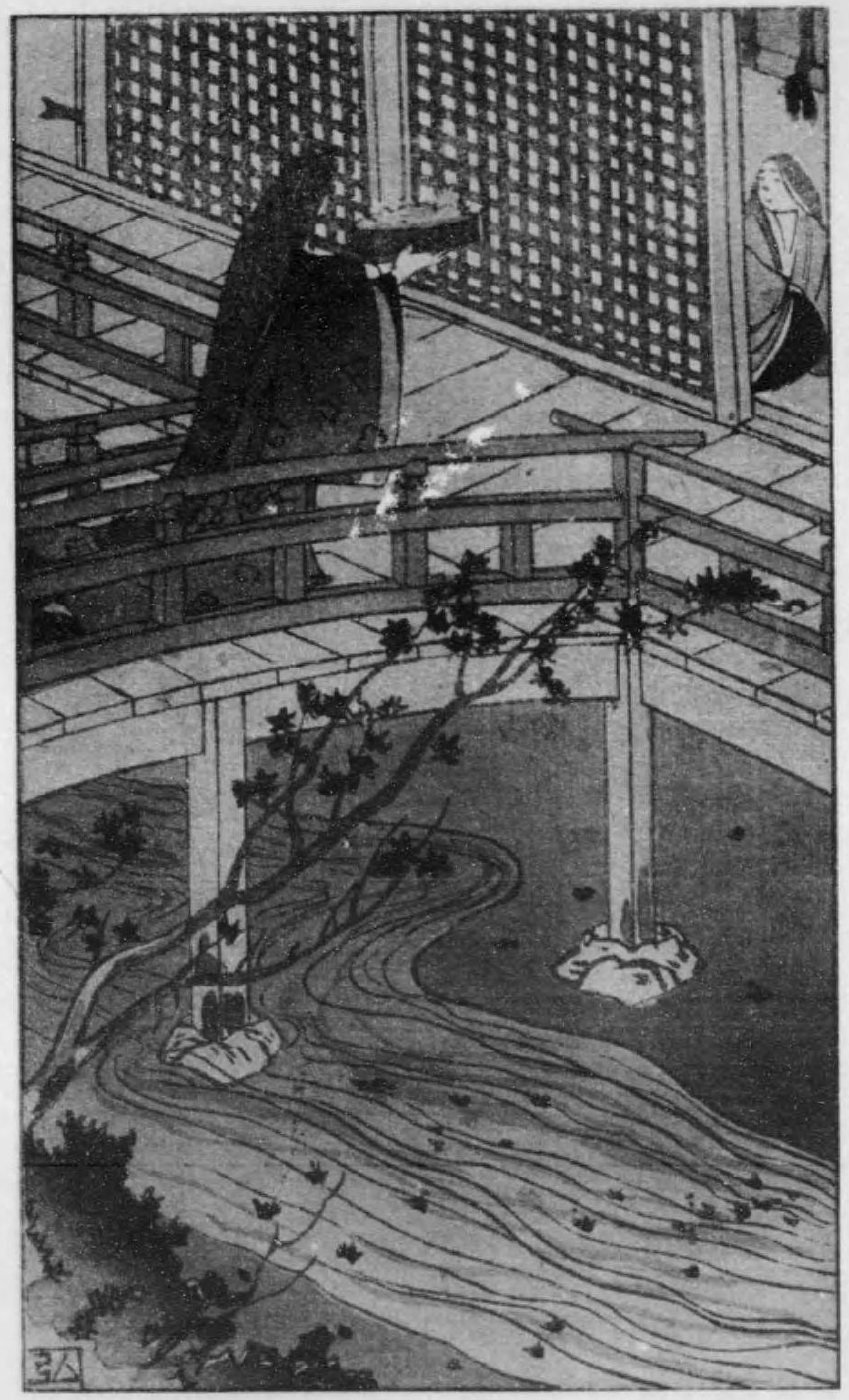
『こんなお話をしたのをお憎みにさへならなければ好いのです。』

と云つて源氏の君は歸つた。西御殿へ來ても紫の君の傍へも行かずに縁に近い處にぢつと坐つて燈籠などを軒に吊らせて泣きたいやうな心を紛らして居た。その翌日は平生よりも一層親らしく王女御の

世話などをやいて居た。紫の君に、

『あなたは春が好きであつて、王女御が秋をお好きなのも面白いから急に皆の好み通りの家を造へようと思ふ。』

などと源氏の君は云つて居た。また大井へ行つたが、この頃は暇でもあつたので少し長く滯留して居た。



槿

朝顔の君は父の式部卿の宮の喪で齋院を辭した。一端思つたことは忘れてしまふことの出來ない源氏の君であるから、いましめの檻の中から戀人が出て來たやうに思つてまた毎日のやうにこの人へ手紙を書いた。それは父に別れた當座の寂しい思に同情してやつたり慰めたりするのであつたが、戀を訴へた以前のやうな手紙を送られる導火線になつてはならないと思つて、朝顔の君の方からは餘り返事もしないのである。九月になつて桃園の宮へ歸つたと聞いて其處には自身にも叔母に當る五の宮も居られるので、その訪問にかこつけて源氏の

君は出掛けて行つた。五の宮は獨身でお通しになつた內親王で、甥の皇子達を子のやうにお愛しになるものであるから、源氏の君も懷かしがつて居た。一つの御殿の東座敷西座敷に別れて年取つた獨身の皇女と若い一人身の王女は住んで居られた。式部卿の宮がお薨れになつて何程も經たないのに、家の中がもう目に立つて荒れたやうで心細い。源氏の君の來たのをお喜びになつて、ごほんごほんと咳をしながら宮はお話しになる。姉君ではあるが太政大臣の未亡人の宮は艶な若い日の面影が殘つて樣子が柔かで男の心を引く力も失せておありにはならないやうであるが、この宮はそんなことは微塵もない。乾枯びたお聲はお年以上などんな老人かと思はれる程である。

『陛下がお崩れになつてからと云ふものは心細くて泣いてばかり居るのに、ここの兄にもまた死なれてな。』

と宮は云つてお泣きになる。

『長命をするからこんな苦にも逢ふと思ふことが多いがな、あなたのことを思ふと位をとられておいでだつたあの中途で死ななかつたので好かつたと思ひます。』

聲を震はしてかう云つてお出でになつたが、直ぐまた、

『美しいなあ、あなたは。小い時私が初めて見た時な、こんな人が人間界に生れたのかと吃驚したものだよ。今の陛下があなたによく似てお綺麗ぢやと云ふ人があるけれど、私はお目に懸らんけれど何と云つたとてあなた程お美しいことはないだらう。』

こんなことをお云ひになつた。云ふ人も滑稽であるが、面と面つて賞められて居る自分も滑稽であると源氏の君はをかしく思つて居た。

『私は田舍へ行つたりしてゐます間に見苦しくなつたと自分でも思ひますが陛下は實にお綺麗なものですよ。あんな陛下は過去にも未來にもないでせう。あなたの推測はまちがつて居ますよ。』

と源氏の君は云つた。
『さうかえ。さうかえ。』
と宮は云つて居られた。
『時々お目に懸れたら命も延びるだらうがなまあ然し陛下はしようがない。同じ叔母でもあなたを婿にしたので今でも家の人のやうにしておいでになる姉が羨しい。死んだ兄もあなたを婿にするのだつたと云つてつくづく後悔してました。』
かう宮がお云ひになつたので源氏の君は胸を騒がせた。
『さうなつて居ましたら私も嬉しかつたでせう。伯父の宮樣もあなたもそんなことはちつとも私に云つて下さらなかつたので。』
と恨めしさうに云つた。ふと彼方の庭の草花などの枯れ枯れになつたのが目に入つて靜かにそれを見て居る美人を想像すると溜らず戀しくなつて、源氏の君は五の宮にそこそこに挨拶して、緣側傳ひに西座

敷へ行つた。黒い緣をとつた御簾に黒い几帳が添へて立ててある間から炷いた香の匂ひが漏れてくるのが一種のなまめかしいなつかしい趣がある。緣側へお坐らせするのも失禮だと云つて源氏の君を外側の座敷へ通した。
『他人の客のやうではありませんか、長い間變らずにお見せして居る志のかひもない。』
應接に出た女に源氏の君はかう云つた。
『父が亡くなつた家に歸つて見ますと、前のことは皆夢だと云ふ氣ばかりしかいたしません。あなたにお禮を申さねばならないことがありますなら、また氣が靜かになつてから申しませう。』
と朝顏の君はまたその女に云はせた。
『神樣を口實になすつて私を追拂ひになることももう出來ないでせう。千分の一萬分の一でも今迄思つて居たことを直接にお話した

いのです。神樣はもうあなたとどんな戀をしても好いとお許しになつたやうなものです。』

『さうではないでせう。私が神樣にお仕へして居る間普通のお交際をして下すつたのですから、私とあなたとはさう決つた男女だと神樣が思つていらつしやるのに、今になつてそれ以上な戀のやうなことをしたら神樣がお怒りになるでせう。』

『神樣はそんなに戀がお嫌ひでせうか。戀をやめさせてくれと業平が云つたのにお聞きにならなかつたのは神樣でせう。』

こんなことを女達に取次がせて雙方で云ひ合つた。逢ふことを勸める者があつても朝顔の君は聞かなかつた。

『もう二十年近くも成るだらうと思ふと、そしてまだはかない戀を續けて居るのだと思ふと味氣なくなります。』

と云つて歸つて行つた源氏の君の美しいことを皆が賞めそやした。

あの人は昔から淺はかな思ひで戀をして居られるのではないといろいろな證據を上げて女王に云ふ者もあつた。態々行つたかひもなしに歸つて來た源氏の君は味氣ない思ひが胸に滿ち滿ちして眠ることもその夜は出來なかつた。戸を早く開けさせて霧の降る庭を眺めて居たが、外の草に這つて哀れな姿に咲いた朝顔を折らせて、それを文と一緒に朝顔の君に送つた。

あるかなきかの朝顔の花を、わが恥しき三十路の姿によそへて給はりしにつけても悲しき心地の多くいたし候。

返事はこんななんでもないやうなことを書いたものであつたが、源氏の君は何時までも何時までもぢつと眺めて居た。女を動かさうとする手紙を書くのに苦心するやうなことも今は不相應な年になつて居ると思ひながら、源氏の君は骨を折つて手紙を作つて居た。紫の君の傍へも行かずに東御殿に居て、前齊院家の宣旨の局を車で迎へにやつ

て、戀の成功を助ける味方にしようとしたりなどして居た。昔でさへもさう云ふ氣にならうとしてもなれなかつたのであるから、三十になつて今更戀に醉ふのなどと云ふことは思つても出來ないことであると朝顔の君は思ふのであつた。もう手紙の返事も一切書かないで居る方が源氏の君の心の熱を醒まさせるのに好いかも知れぬなどとも思つて居た。女は誰でも自分には靡くものと思つて居た源氏の君はいよいよ心をいらだたせて居た。それがもう世間の評判に上つて、前齋院を手に入れようとする爲に源氏の君は五の宮に親切を盡して居るなどと云ふ。これが紫の君の耳にも入つた。當分のうちはそんなことはあるまい、さうだつたなら打ち明けた話を自分は聞く筈であると思つて居たが、遂には噂を否定することが紫の君に出來なくなつて來た。見て居ても魂が身に添つて居ないやうなことがある。話をして居てとんでもないまちがつた返事などをされて悲しい時がある。

同じ女王と云つても朝顔の君は齋院にまでなつた人で、世間から尊敬されて居ることは自分の比ではない。その人に源氏の君の心が移つてしまつたなら自分は哀れなものであると紫の君は歎いて居た。源氏の君の妻として並ぶ人のない愛を負つて立つて居た人であるから侮りにくい競爭者らしい人を見ては地位の動搖するのを憂ふるのも道理である。捨ててしまふやうなことはなくても、情人の一人として輕んじて見られるに至るであらうと思ふと堪へがたい。明石の君のことなどは自身に強身があるから、かれこれと云つて男の云ひ訣を聞くのも慰みの一つになつた、そんな塲合ではないひしひしと身に迫る悲しい恨めしい事は却つて口へは出ない。默つて知らぬ顏を作つて紫の君は苦しい胸を被つて居た。參內して宿直所に泊つて二條院に歸らぬことが多くなつて、家に居ても文ばかり書くのを役目のやうに源氏の君はして居る。紫の君は一寸でも自分に漏らしてくれたならと

思ふが、そんなこともしてくれない。冬になつても國母の喪中である今年は、行はれる神事儀式もない暇さに五の宮の訪問ばかりを源氏の君はした。雪の降る日の夕方、また外出の着物に香を薫きしめて居る源氏の君を傍に見て居る紫の君の心は云ひ顯しやうもなく悲しかつた。

『五の宮が御病氣なのだから、また一寸お訪ねして來ます。』

傍へさう云つて行つた源氏の君を見ようともしないで、紫の君は姫さんを膝の上に置いて遊ばせて居た。目にいつぱい涙の溜つて居るのを見て、

『なぜあなたはそんなに機嫌を惡くして居るのだ。餘り傍にばかり居ては珍しくなくなると思つて、態と私はこの頃外へよく行つたりなどするのだのに、それが却つていけないの。』

と源氏の君は云つた。

『珍しくなくなられたのは眞實に悲しいものですね。』

と云つて彼方向いて紫の君は泣いた。これを見捨てて出る氣にはなれないのであるが行くと云ふことを宮にお云ひしてやつた後であるからやめることも出來ずに源氏の君は出て行つた。こんな時が自分に來ようとは夢にも知らずに居たなどと思つて紫の君は悲しんで居た。雪の光に美しい後影の見えるのを眺めながら、戀しい人の姿を見ることの出來ない身になつたらと、そんなことまでも思つて泣いて居た。

『參內する以外に出歩くのはおつくうになつたのだけれど、自分が死んだら五の宮樣のお世話を賴むと式部卿の宮樣が私に云つてお置きになつたものだから。』

こんなことを伴れて行く家來達にも源氏の君は云つた。家來達はそれを拙いお言ひ訣だとをかしく思つて居た。變つたことが起らなけ

ればいゝがと紫の君のために眉を顰める者もないではなかつた。何時も變らない同じやうな話を、眠いのを辛抱してお聞きして居ると五の宮も欠をおしになつて、

『宵惑ひでな。話もろくに出來ない。』

とお云ひになつたかと思ふと、もう鼾をかいてお出でになつた。内心に喜んで立つて行かうとすると、また源氏の君を年寄の女が呼びとめた。

『御存じで御座いませう。院の陛下がお祖母と仰せになりました私です。』

かう云ふのを思ひ出して見ると、それは源典侍であつた。この尼宮の弟子尼になつて居ると聞いたこともあつたが、もう死んだのであらうと源氏の君は思つて居たのである。

『奇遇ですね。』

と云つて源氏の君はまた坐つた。

『こんなに年寄になつてしまひました。』

と云ふ。この頃漸く老人になつたやうな口振がをかしい。この人が居た頃の宮中の女御や更衣はもう大方死んだ。生きて居ても何處に居るのか分らなく皆なつて居る。女院などさへも故人になつておしまひになつたのに、この人がかうして不身持の報いらしくもない氣樂さうな尼生活をして長命を恣にして居るのが不思議に思はれるにつけ、女院の死がまた新に悲しまれて源氏の君が萎れて居るのを見て女は自身のことが悲しまれて居るのだと得意にも思つて居た。まだ若い男と戀の言葉を取り替す甘い樂を夢みて居るのである。

『そのうちゆるりと話しませう。』

と云つて源氏の君は典侍に別れた。時刻は遲いのであるが、お入來を拒んだやうに思はれてもならないと西座敷の方では源氏の君のため

に少しばかり戸を開けてあつた。
『御自身でお逢ひ下すつて話がして戴けたら私はそれを機會に戀を斷念しても好いとも思ひます。』
こんなことも云つたが朝顏の君は聞かない。自分も源氏の君も若くて戀の過ちがあつても物議にもならない時代でさへも、自分は身を退いて居たのに、今になつて一段親しい交際をしようとも思はないと朝顏の君は思ふのである。餘程夜も更けて烈しい風の音が耳の傍で鳴る。
心細さうに默然として源氏の君は坐つて居るのであつた。
『昔もさうであつた冷淡なお心に懲りて居る筈であるのに思ひ切れない自分と云ふものも恨めしくなります。』
かう云つた源氏の君は涙を袖で拭いて居た。
『昔に變らないのが好いのだと思つて居ます。私は自分のことでなくても心變りをする人などは厭だと思つて居ますから。』

六條の君の戀の末路の哀れであつたことが朝顏の君は今も忘れられないのであつたから、皮肉を云ふ積りでもなしについこんなことを云つた。
『姫樣は何故ああ冷酷に遊ばすのでせう。お氣の毒でお氣の毒で私がこんな目に逢つて居ると云ふことが世間へ知れては耻しいから、默つて居てくれなどと宣旨さんに云つていらつしつた。』
源氏の君の歸つた跡で女達はこんなことを云つて居た。朝顏の君は源氏の君をなつかしい人とは思つて居る。戀しいとも思はぬでもない。さうであるが世間の女見たやうに身體をその人の物にしてしまふのが戀の終局の望とは思つて居ない。然しこんな淡い清い考で戀を爲合ふと云ふことは男に出來るべきことでないから、いつそ冷い態度をとつて行くのが好いと思つて居るのである。尼にならうかともおもふが當附がましい爲打のやうに源氏の君がとつてもならないと

思つて時期を待つて居た。兄弟は大勢あるが皆腹違ひであるから疎疎しくて足らぬがちになつた宮家の經濟を補はうとする者はない。こんな場合であるから、わが主人と富貴な源氏の君との緣組を女達は皆望んで居た。源氏の君は世間の批難もかまはずに再進して樣つた戀を遂げないで終つてはいよいよ物笑ひになるとこの事にばかりこがれて紫の君の傍へ寢る夜も少くなつた。忍んで居ても紫の君は源氏の君の前で涙を零すこともあつた。

『何故そんなにして居るの。』

と云つて、紫の君の額に掛つた髮を手で除けながら、心配さうな顏を源氏の君はその傍へ持つて行つた。

『女院がお崩れになつてからは陛下が寂しくお思ひになつて居るのがお氣の毒でつい御前で夜を明したりするやうになるのです。今迄のやうに私が一緒にばかり居ないので氣が塞ぐのは道理だけれ

ど、私を疑つたり自身を不安に感じたりすることは入りませんよ。あなたはもう二十五でせう。それだのに子供見たいな人だね。思ひ遣りがないね。』

かう云つて涙で癖の附いた髮の毛を直してやりなど源氏の君はするのであつたが紫の君は物も云はない。顏を見られないやうに、見られないやうにと彼方向ける。

『一寸したことをそんなに拗ねても好いやうな癖は私があなたに附けたのですね。』

味氣なさうに云つて源氏の君は溜息をついて居た。

『前齋院に私があなたの事を忘れて戀をして居る樣にあなたは思つて居るのぢやないの。そんな事で取越し苦勞をして居るのぢやないの。あの人は昔から私の女友達のやうに思つて居る人なんですよ。私の方でそんな戯談を云つても笑つてしまはれる程のもので

すよ。誤解して居るのなら思ひ直して下さい。』

こんなことを云つて源氏の君は朝はやくから終日紫の君を慰めたり賺したりして居た。雪が澤山積つた上に淸らかな月が美男のやうな顏を出した。

『私は春や秋よりも冬が一番好きだ。』

と云つて源氏の君は簾を捲き上げさせて、女の童を庭へ下して雪まろげをさせた。黑い髮が目に立つて美しい。そのなかでも小いのは子供らしく騷いで走り步いて雪の上へ扇を落したりして居る。大きく塊りを拵へようとして轉すのであるが、もう力が足りなくなつて困つた顏をしたのもある。緣側へ出てそれを見て笑つて居る女の童連中もある。

『昔ね、女院が中宮でいらつしつた頃、藤壺の庭で雪の山をお拵へさせになつたことがあつた。そんな風流な面白いことをさせるのがお

好きな方だつた。何かに附けて何時も私は彼の方を思ひ出す。私などの知つて居るのはほんの一面だけだらうけれど柔かであつて氣品の高いあんな氣性の女の人はまあないね。あなただけは別だ。あの方の姪なのだから何處から何處まで似て居る。けれどものを恨んだり腹を立てたりする女院にない餘計な性質もあなたにはあるね。』

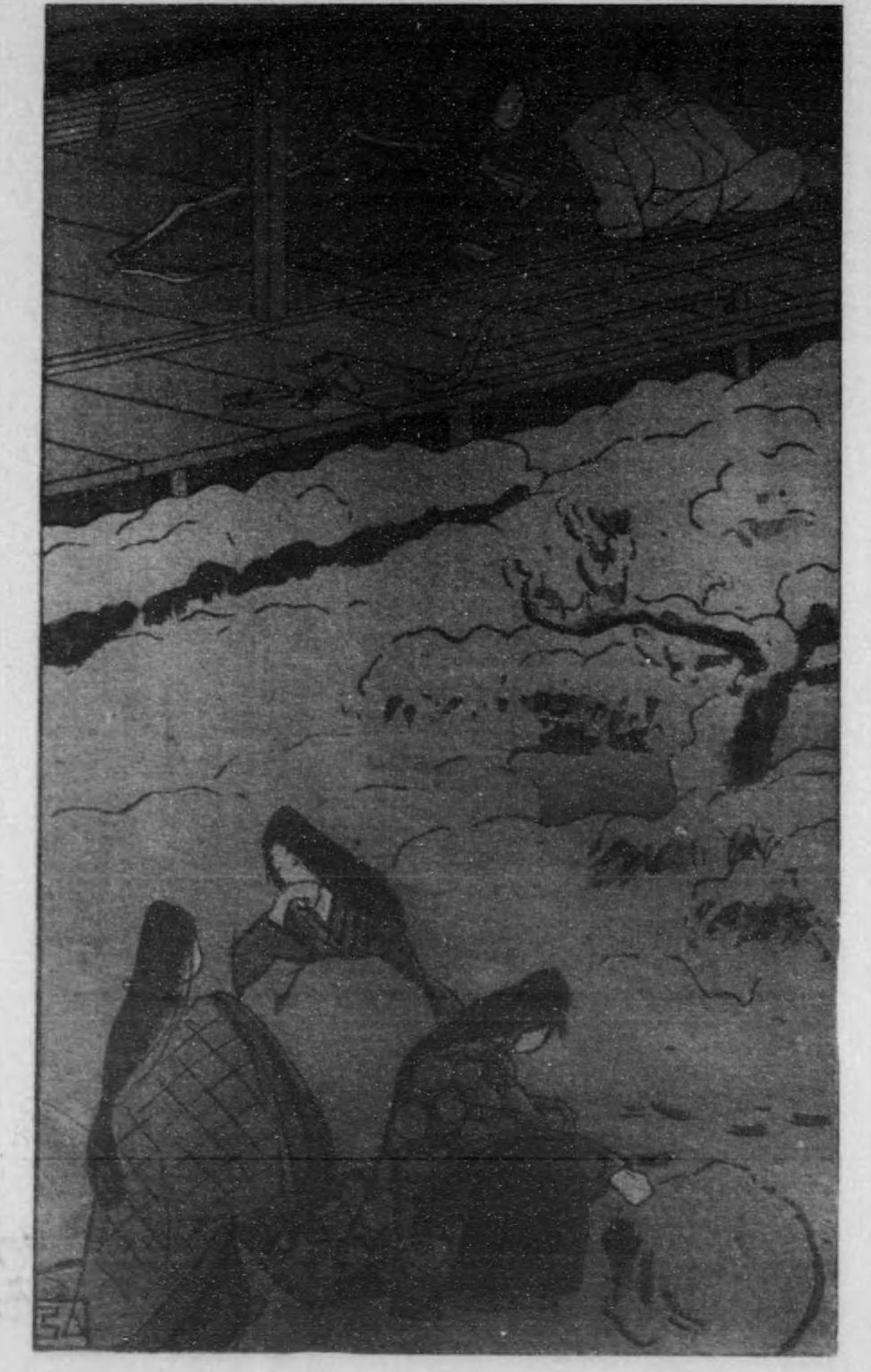
かう源氏の君に云はれて、紫の君は耻しさうに笑つた。

『前齋院と云ふ人も變つて居る。親しみのある性質だけれど傍へ行つたら私が氣遲れをするだらうと思ふやうな人はあの人一人だよ。』

『尙侍が丁度そんな方だと云ふぢやありませんか。それにどうしてあんなことがあつたのでせう。』

と紫の君は云つた。

『さうだね。さう云つたよりも美人の例に引く人だよ。』



と源氏の君は云ひながら、身を過たせた尙侍を思つて少し涙を零した。
『あなたは侮つて居るけれど、大井に居る人は身分に不相應な性格を持つた立派な女ですよ。氣の好い女と云ふのは東の院に居る人だ、ああは出來ないものだけれど。』
などとも源氏の君は云つて居た。女院の夢をその夜源氏の君は見た。
『やつぱり浮名が立つたではありませんか。』
と恨めしさうにお云ひになつたので答へようとしても物が云へない。
『あなた、あなた。魔はれてはいけません。夢ですよ。あなた。』
と紫の君が云つたので目が覺めた。胸の騷ぎが容易に靜まらないで涙が零れた。

乙女

女院の御喪期が濟んで、世の中は夜の明けたやうに花やかな初夏になつた。加茂祭を今年は餘所事に聞いて居ると云つて、前齋院家の女達は詰らながつて居た。五の宮は朝顏の君によく、

『あなた、源氏の内大臣と結婚をなさつたら好いだらう。お薨れになつた宮樣も前からそのお氣が十分あつたのだが、あなたが承知しないで居るうちに齋院になつておしまひになつたと云つて、何時も殘念がつておいでだつたのだよ。一つは三の宮樣の婿でもあるから、多少御遠慮もあつたのだが、その奧樣もお死になつたし、今になつて

またあんなにあなたを戀をしておいでなのだから。』
とこんなことをお云ひになつた。
『お父様も爲方のない强情者だと思つておいでになつた私ですから、今更結婚をしようとは思ひませんわ。』
と朝顏の君は云つて居た。葵の君の忘れがたみの夕霧の君はもう十三であるから、二條院で元服の式を上げたいと源氏の君は思つたが、祖母の宮がお見になることの出來ないのを氣の毒に思つて故關白家でした。源氏の君は、この子のために四位を乞はうかとも一度は思ひ世間でもさうあるべき筈だと思つて居たが、自身が關白をして居る時代で何事も自由になるからと云つてもこんな幼年者を不相應な四位にするのは宜しくないとまた思つた。元服した夕霧の君は六位の制服の淺黄の袍を着せられた。祖母の宮はあさましいことにこれをお思ひになつて、その後來訪した源氏の君に、

『あの子を六位におしになつたのはどう云ふお考へなのですか。』
とお云ひになつた。
『意外にお思ひにもなるでせうが、私は彼を大學へ入れて勉强させたいと思ふのです。ここ二三年まだ元服しないで居ると思つて居れば好いと私は思つて居るのです。朝廷の御奉公が眞實に出來るやうになれば自然に位などは上りませう。若い身で思ひ次第の榮職に就いたりしては學問に身を苦しめたりすることは馬鹿馬鹿しくなるでせう。遊ぶことばかりが好きな爲方のない人も親や親族の威光で世間からはえらい者のやうに立てられて居るでせうが、盛衰のある世の中で、その人達にがたりと死なれて御覽なさい。世間からは手の裏を返したやうに侮蔑されませう。自身でも恃む處がない心細い思ひをするのも學問のない人に限ることです。學問があつてこそ大和魂も發揮することが出來るのですから、當分のうちは

自身でも身がひけるやうな思ひもするでせうが國家の柱石になる基礎を固めて置くやうなものですから、私が亡くなつても心配することもいらないと思ふのです。私が随いて居れば大學生の貧乏人とも人は云はないだらうと思ひますから。』

と源氏の君が答へるのをお聞きになつて、

『さう伺ふと道理なのですがね、大將なども餘りに異例だと云つて愍然がるものですから子供心で殘念に思つて居るやうで、伯父達の子供を今迄自身よりも目下に思つて居たのが四位や五位で、その下に自身が随いて居なければならなくなつたのが溜らないやうに見えるものですから、ついそんなことを云ひました。』

と宮はお云ひになつた。源氏の君は笑ひながら傍に居るわが子を見て、

『生意氣なことを云ふ割合に小い人だね。』

と云つて、可愛くてならないやうにも思つた。夕霧の君の儒者號を附ける式は東の院の東御殿で行はれた。珍しいことであるから高官達が我も我もと見に來た。今日の上客は大學の教授の博士連であることは云ふまでもない。自分の子であるからと云ふやうな遠慮はいらない、法式通り嚴格に行つて貰ひたいと、前から源氏の君が云つて置いたので借着で皆身に合つて居ないやうな服裝をしながらすらりと上座に並んで坐つた。接待に出た若公達はさんざんに叱り飛ばされる。右大將や民部卿なども叱られた。忍びきれないで笑ふ者があると、

『鳴りが高い。默ることが出來なければ席をお引きなさい。』

と云ふ。皆が面白がつて居る中でも大學出身の人達は得意に見えた。夕霧の君の勉强所を源氏の君は東の院に拵へさせて家庭教師を附けておいた。今も赤兒のやうにしてお可愛がりになる祖母の宮の傍へ置いては物が覺えられまいと源氏の君は思つたからである。月に三

度宮の所へお伺ひしても好いと源氏の君は許した。　こんなに學問に苦しまないでも勝れた人間になれないこともないだらうがと、夕霧の君は思はないこともなかつたが、眞面目な人であるから、辛抱して早く課程の學問を終りたいと思つて勉強して居た。　さうであるから四五個月のうちに史記などを讀んでしまつた。　もう試驗を受けさせても好いだらうと思つて源氏の君は自身の前で伯父達や家庭教師の大内記と一緒に夕霧の君に史記の中の難しい所々を讀ませて見た。　出來の好いのを見て、

『祖父が生きて居ましたらどんなに喜ぶことでせう。』

と云つて右大將は泣いた。　大學の豫科から本科へと他の學生と同じやうに夕霧の君の踏んで行くのが學問の道の奬勵にもなつた。　立后については梅壺の王女御、弘徽殿の女御、紫の君の妹の元の兵部卿今の式部卿の宮の王女御の中に激烈な競爭があつたが、結局源氏の君を後

援に持つて居る梅壺の王女御が后の宮におなりになつた。　源氏の君は太政大臣になつて右大將は内大臣になつた。　源氏の君はこの人に關白も讓つた。　博學な手腕のある政治家であるからこの職が危げでもない。　腹違ひのもませて子は十人餘りあるが、名門の子として恥しくない善い子ばかりで、もう相當な地位をえて居る人もある。　女は女御の外にもう一人あるだけであつた。　雲井の雁の君は或女王の腹に生れたのであつて、母系の立派なのは本妻腹の子にも劣らないのであるが、某女王は内大臣との間に雲井の雁の君を生んでから按察使大納言の妻になつて、今の夫の子を幾人も生んで居るのであるから、そんな所へ置いておくのは可愛相であると思つて、内大臣が引き取つて母の宮に預けたのであつて、内大臣は女御の半分程も可愛くは思つて居らぬやうすであるが、性質も容貌も美しい人である。　雲井の雁の君と夕霧の君とは同じ祖母の手で大きくなつたのであるが、雙方とも十を越

した頃男の子と餘り馴れ馴れしくして居るのは宜しくないと内大臣が云つて居間なども別にさせた。　併し幼い二人の戀はもうその時分には芽ぐんで居た。　綺麗な花を持つて行つて贈つたり、雛遊びの相手になりに行つたり夕霧の君はした。　乳母なども今迄さうして來た間柄であるのを俄にそれが惡いとも制することが出來なくて捨ててあつた。　一方は無邪氣な少女であつたが男の戀はもう大人びて居た。東の院へ移されたことはこのことがあるので夕霧の君には苦痛であつた。　幼い手跡で遣取して居る手紙などを拾つたりすることがあつて、二人の關係を知つた女達もあつたが、内大臣や祖母の宮のお耳に入れることでもないと思つて知らぬ顔をして居た。　時雨が降つて、荻の上を吹く風が悲しく聞える日の夕方に内大臣が來て、宮のお居間へ雲井の雁の君を呼んで琴を彈かせなどした。　宮はあらゆる音樂に通じて居られるのであるから雲井の雁の君にはよく敎へておありになつ

た。

『琵琶は女には不似合なやうですが實際は上品なものですね。　あまり上手な人もないやうですが、源氏の大臣が明石から呼んで嵯峨邊に置いてある女の人と云ふのはそれの名人ださうです。　大臣から聞いたのですから眞實のことでせうが、珍しいですね。』

などと内大臣は云つた。

『幸福者だとよく噂を聞きますがね、餘程怜悧な人ですね。　生んだ子を手許へも置いておかずに本妻の方に渡してしまふなどと云ふことは出來ることではないがね。』

と宮はお云ひになつた。

『怜悧ですから幸福者にもなるのでせう。　それにしても私の家の女御などはまあまあ足らないこともない女だと思つてましたが、意外な人に負けてしまひました。』

と內大臣は遣瀨なささうに云つて、雲井の雁の君を見て、

『これだけでもゆくゆくはお后と云はせたい、東宮の御元服も近いうちのことであらうからと私は思つてましたが、後にもうその幸福者の生んだお后の候補者が出來て居るのですもの。』

またかう云つて溜息をついた。

『さう氣を落すこともないでせう。この家はお后が出る家なのだとお云ひになつて、お父樣が先に立つて女御をお上げするやうにもなすつたのだから、もう暫く生きて居て下すつたら女御は負けも取らなかつたらうがね。』

と宮はお云ひになつた。このことだけには源氏の君をも恨めしく思つておいでになるのである。內大臣はそれなり默つてじつと人形のやうな美しい姿で琴を彈いて居る雲井の雁の君を見て居た。夕霧の君が東の院から來たので几帳を置いて其處へ通した。

『あまり逢はないねえ。さう勉强をばかりさせるのはよくないと云ふこともお父樣は知つておいでなのだらうがね。偶には笛なんかも吹いて御覽。』

と云つて內大臣が笛を渡すと夕霧の君は面白く吹いた。暗くなつたので灯をつけさせてそれから雲井の雁の君を居間へ歸した。內大臣は母と甥と三人で夕飯を食べた。雲井の雁の君とはなるべく間を隔てたいと大臣は思つて、彈く琴の音さへも夕霧の君には聞かせないやうにするのであつた。

『若樣が餘りお可愛相ですね。こんなことで一騷動が起るかも知れませんよ。』

などと云つて居る者もあつた。內大臣は歸つたやうに見せて關係のある女の部屋にはいつて居て、それからそつと出て行かうとして廊下を通る時、自身が聞くとも知らずに自身の陰口を云つて居るのが耳に

入つた。

『脫目がないやうに思つていらしやるのだらうけれど、私達から見ると親馬鹿ですね。何も御存じなしに姬樣を皇太子樣の女御に上げるなんか云つていらつしやるのですもの。』

これを聞いた內大臣ははつと胸が轟いた。夕霧の君と雲井の雁の君との關係を猶いろいろと語つて居た。思はないことでもなかつたが、そんなこともあるまいと油斷して居た自身の過ちが口惜しくてならない。世の中はこんな厭なものかと云ふ氣もしたがその儘そつと來た。今になつて前驅が人を追ふ聲が聞えたので、

『誰かの所に今迄いらつしつたのですね。浮氣の止まない殿樣。』

と云ふ者もあつた。

『あの話をして居た時ね、誰かが廊下に居たのです。好い香がしましたから若樣がお通りになつたのだと思つてたのですよ。あれがお耳に入つたのだつたら大變ですわね。』

『眞實にとんでもないことをしたものですね。』

先刻陰口を云つて居た者は心配さうにこんなことを云つて居た。內大臣は道々、それほど惡い緣でもないが、一緒の所で育つた從兄弟同志の結婚は野合で成立つた夫婦だと世間でも認めるに違ひない、それに女御を踏附けたやうな爲打をした源氏の君の子にその妹を配す氣にもならない、東宮の女御にして萬一の僥倖でも待たうと思つて居るのだつたになどと思つて腹立たしさが靜まらなかつた。この人と源氏の君との間柄は大體昔の通りで、決して惡くはなつて居ないのであるが、一寸したことでは互の意志の行違ひになることなどもないのではない。內大臣は夜も寢られない程そのことで煩悶した。

『可愛くて溜らないお孫さんですから、宮樣も知つて知らぬ顏をしておいで遊ばすのでせう。』

などと女達の云つて居たことを思ひ出すと宮様が恨めしくてならない。感情の烈しい人であるから、さう思ふとぢつとして居ることも出來ないで、二日程してまた宮の處へ來た。こんなに近々と内大臣の來るときは宮の御機嫌は好い。いそいそと美しい袿などをお着になつてお逢ひになる。大臣はむづかしい顔をして居た。

『かうして參つて居ても女達の目からどんなに私が馬鹿に見えて居るだらうかと思ふと氣がさします。つまらない人間ですけれど、生きて居ます間は始終お傍へ來て御機嫌も伺つて居たいと思つてましたのですが、馬鹿者のために私の心があなたをお恨みするやうになりました。こんなことを申し上げないで置かうと思ふのですが胸が靜まらないのです。』

と云つて大臣は涙を袖で拭いた。驚いて聞いておいでになつた宮も涙が出て假粧した顔のお目が大きくなつて見える。

『こんな年寄が何をあなたの氣に逆つたのだらう。』

おろおろ聲でかうお云ひになるのを聞いては大臣もさすがにお可愛相に思つたが、

『小い者のお世話を願つて、親でありながら自分が面倒を見ませんで上の女の子のために浮身をやつしてましたが、それでもあなたに監督して頂いて居ると思ふものですから安心をして居たのです。從兄弟同志で勝手な戀をして身を過つたりなどしたかと思ふと殘念でなりません。婿にしても耻しくない立派な身分だと云つても、内輪同志のやうな結婚は世間で何と云ひますか。あの人の爲にだつて喜ぶべきことぢやありません。内輪の縁などのない外の所で婿君だと云つて珍重される方がどんなにいいか知れません。源氏の大臣も甥に女を押しつけたやうに私の事をお思ひになるでせう。たとへまたさう云ふことにしようとあなたがお思ひになつても、私

に相談して下すつて正式の結婚をなせさせて下さらなかつたのです。勝手なことをさせて見ぬ振などをしておいでになつたのがお恨めしいのです。』

と云つた。宮は夢にもお知りにならなかつたことであるから聞くごとに呆れておいでになつた。

『それはあなたの腹を立てるのは道理だけれど、私は若い人達の心持も内密事もすこしもしらなかつたのですよ。そんなことは私の方があなたよりも餘計殘念に思はなければならないことだのに、私までも同罪に思つてくれるのは餘りです。手許へ來た時から可愛くてあなたがそれ程にしようと思つて居ない處まで私が氣をつけて、お后になる資格を持たせた女にしたいと思つて居たのです。女の生んだ孫の可愛さに目がくれて、年の行かない者と緣を組ませようなどとそんな沒常識なことを考へるものですか。然しこのことは誰

があなたに云つたのですか。うつかり人の云ふことを信じなどしては自身の子にありもせぬ傷を附けるやうなことになりますよ。』

『ありもせぬ傷なものですか。女達が陰で笑つて居ることを思ふと溜らない。』

半獨言のやうに云つて大臣は座を立つた。事情をよく知つて居る女達は宮をお氣の毒に思つて居た。前の晩にその話をして居た人達はことの成行きに恐れて死んだやうになつて居た。雲井の雁の君は無心な美しい顔をして、入つて來て、父を見た。

『年が行かないと云つても、それ程もの事が分らないとも思はないで、あなたを人並の者だと思つて居たかと思ふと、あなたより私がすたり者になつたやうに悲しい。』

と云つて、それから大臣は傍に居る乳母なども責めた。

『もう取り返しのつかないことはいくら云つても爲方がない。評判

も立つことだらうがおまへ達は罪亡しに極力それをないことだとお云ひ消しなさい。近いうちに私の家の方へ伴れて行くつもりだ。おまへ達も然し喜んでそんなことをさせたのではないだらう。宮樣のお心から出たことなんだらうから。』

こんなことも云つた。宮は可愛い中にも夕霧の君の可愛さの方が强いのであるから、このことをそれ程いけないこともお思ひにならない。もとよりそれ程大切に思つて居なかつた子だつたのを、自分が存分に育ててやつたればこそ、皇太子にお上げする氣にもなつたのではないか、さう云ふ事が望み通りに行かないで普通の人と緣組をさせるやうなことだつたら、これ以上の婿はあるものではないではないかとお思ひになつて、夕霧の君の爲方が惡いと云つて腹を立てて居た大臣を恨んでおいでになつた。自身のためにこんな騷ぎが起つて居るとも知らないで夕霧の君が來た。この間の夜は伯父が居て雲井の雁の

君と思ふやうに話が出來なかつたために逢ひたくなつて來たのであるらしい。平生夕霧の君が來ると宮は云ひやうもない笑顏でお迎へになるのであつたが、今日はさうでない。眞面目なお顏をしていろいろと話をされた後で、

『あなたのことで內大臣が此處へ怒つて來たのよ。好いことでないことを初めて、いろんな人に心配をさせてこまつたのねえ。あなたに云はないでも好いことなのだけれど、そんなことになつて居るのを知らないで居るといけないと思ふから。』

とお云ひになつた。自身の罪を知つて居る夕霧の君には此處で今日起つた出來事が直ぐ想像された。顏をぼつと赤くして、

『何でせう。勉强ばかりして居て何も外のことはこの頃しませんのに』

と云つた。恥ぢた苦しさうな樣子をお見になると宮は可愛さうでな

らない。

『これからでも氣をつければいいのよ。』

と云つて、後を外の事に紛らしておしまひになつた。これからは手紙を遣取することもむづかしくなるのであらうと思ふと、夕霧の君は悲しくてならなかつた。食事をすすめても食べない。横になつて寢た振をして居たが、心はどうかして雲井の雁の君に逢ひたいと云ふことばかりを思つて居た。皆が寢靜まつてから、雲井の雁の君が居る座敷の襖子の處へ來て開けようとしたが錠が下りて居た。心細くなつて夕霧の君はそのまま襖子にもたれて居た。雲井の雁の君も竹に鳴つて居る秋風の音や遠方で啼く雁の聲などを聞いて居ると悲しみが胸いつぱいになつて寢られないで居た。

『私のやうに雁も悲しいのだらうか。』

戀しい人の云ふ獨言が耳に入つた夕霧の君は、嬉しくて、

『小侍從は居ないのですか。』

と云つた。雲井の雁の君は何とも答へないで顏を蒲團の中に隱してしまつた。そして、幼は戀人同志は見えぬ所で同じやうに熱い涙を零して居た。夕霧の君は翌朝早く起きて手紙を書いて渡さうと思つて居たが小侍從に逢ふことも出來なくて胸ばかりわくわくとさせて居た。大臣はそれきり來ない。夫人にはそんなことのあつたと云ふことは少しも話さないのであるが、何と云ふことなしに大臣は毎日機嫌がわるかつた。

『中宮が花々しくしておいでになるのを見ると女御はさぞ味氣ないだらう。ゆるりと家で暫く遊ばせてやりたいやうな氣がする。』

と大臣は云つて、陛下が暇を與へにくさうにおしに、なるのを強ひて願つて女御を宮中から迎へて歸つた。

『寂しいだらうから、妹を伴れて來てあなたの遊相手をさせよう。宮

様にお預けしておいて安心なやうなものだけれど、もう大分大きくなつたのだから、年の行つた女達とばかり居させるのも善くないと思ふから。』

と内大臣は女御に云つて、雲井の雁の君を急に此處へ引き取ることにした。行つてさう云ふと宮は本意なくお思ひになつたが、かうと思つたことは思ひ返す人でないのを知つてお出でになるから、恨みながら諦めておいでになつた。また夕霧の君が來た。一寸でも逢ふことが出來るかと思つてしげしげこの頃は來るのであつた。内大臣の車があつたので氣が咎めてそつと家の中へ入つて自身の居間にしてある處に隱れて居た。

『これから參内して、夕方に迎へに寄ります。』

と云つて大臣はこの家を出た。大臣は世間體を好いやうに繕つて、主人を夫婦にさせようかともおもふのであつたが、男の官位がも少し昇

進した上、深い愛情のあるなしも見定めて、改めて正式な結婚をさせる方が好いであらうと思つたので、女御の遊相手にと云ふ口實を作つて穩かに伴れて行かうとするのであつた。

『私は年寄だから、そのうちあなたとは死別れをせねばならないと思つて悲しがつて居たのだけれど、こんなに生別れをせねばならないやうになりました。死んだ女の子の代りだと思つて、どんなにあなたを育てて行くことが私には樂みだつたらう。それにしても違つたお母さんの所へお行きなんだから可愛さうだね。』

傍へ來た雲井の雁の君に宮はかう云つてお泣きになつた。雲井の雁の君は自身の戀の過ちからこんなことになつたことを知つて居るから、耻しくて顏も上げないで泣いてばかり居た。年齡は十四であつた。まだ調はない所もあるが美しい。夕霧の君の乳母の宰相の君が出て來て、

『私どものためにもあなたは御主人だと思つて居ましたのに、彼方へおいでになるので御座いますか。ねえ姫樣お父樣がまだどんな方と御緣組をさせようとおしになるかも知れませんが、そんなことを御承知遊ばしてはいけませんよ。』

と小聲で云つた。雲井の雁の君はいよいよ耻しがつて物もよく云へない。

『そんなむづかしいことを云ふものではないよ。緣ばかりは分らないものだから。』

と宮が横からお云ひになつた。夕霧の君が几帳の後に隱れて泣いて居るのを、乳母は可愛さうでならなく思つて、居間へ歸つたやうに宮をお欺しして夕方の暗まぎれに雲井の雁の君を伴れて來て逢はせた。暫くの間二人はものも云はないで泣いて居た。

『伯父樣が彼樣に怒つていらしやるから、思ひ切らうと思ふのだけれ

ど、やつぱり戀しい。こんなに逢はれなくなつてしまふのだつたら、もつとよくこれまで逢つておけばよかつた。』

『私もさう思ふの。』

『思ひ出してくれますか。』

と男が云ふと女は點頭く。灯が彼方此方について大臣が歸つて來た。前驅の聲が騷しく聞えてくる。女達がはらはらとして、

『どうしたら好いでせう。』

と小聲で云ひ合つて居る。雲井の雁の君は戰慄へて居る。夕霧の君はそれでも戀人を彼方へやらうとはしない。雲井の雁の君の乳母が搜しに來てこの樣子を見てびつくりしたのも道理である。やつぱり宮樣が知つてさせてお置きになることだなどとも思つた。

『こんなことはお母樣の處の大納言樣に聞えても面目ない。いかに好いお家の若樣でも六位の婿樣はいやなこと。』

と云つて居る聲が聞えたので、自分を嗜めるつもりで云ふのであらうと思つて夕霧の君はあさましくなつて厭な氣持がした。

『あんなことをあなたの乳母が云つてます。』と女に云つた。間もなく雲井の雁の君や附いて居る女達を乘せた三つの車がこの家から出た。新嘗會の五節の舞姫の一人を今年は源氏の君が奉ることになつた。按察使大納言の妾腹の子左衛門督の子、近江守の良清の子などが出るのであつて、今年の舞姫は直ぐに女官に採用されると云ふのである。源氏の君は攝津守惟光の美しいと云ふ評判のある女をそれにえらんだ。舞は自宅でよく習はせて前日の夕方に二條院へ伴れて來た。夕霧の君は雲井の雁の君と別れてからは書物も讀む氣にならないで鬱いでばかり居るのであつたが慰みにもなるかと思つて二條院へ舞姫を見に來た。美しくて樣子のしづかな若殿を若い女達はなつかしがつて居たが、源氏の君は紫の君の居る所では

簾の前へも夕霧の君を坐らせない。藤壺の宮を自身が戀したはじめの心などから美しい繼母の傍ほど危いものはないとおもはれもするのであらう。女達なども親しくないのであるが、今日は騷しいのに紛れて御殿の中を彼方此方と夕霧の君は歩いて居た。屛風で圍つて拵へた舞姫の假の部屋の傍へ寄つて、そつと覗くと舞姫は横になつて苦しさうにして居る。丁度雲井の雁の君と同じ程の年齡である。背丈はこの人の方がすこし高いやうで、姿や顏などはその人よりも美しい。暗いのでよくは見えないのであるが、戀しい人に似たやうな氣がするので、心が移ると云ふ程でもないがこの人もなつかしい。傍へ寄つて着物の端を手で引いた。驚いて居る舞姫に、

『私は久しい前からあなたのことを思つて居るのです。』と夕霧の君はこんなことを云つた。わかい美しさうな男の聲ではあるが誰とも分らないから舞姫は恐いやうな氣がして身體を後の方へ

引いて居た。其處へ世話役の女が假粧を直すとか云つてどやどやと入つて來たので夕霧の君は心を殘しながら出て行つた。今年の五節の舞姫はみな少し大きくそして美しかつた。源氏の君は庭で舞ふのを陛下の御前に居て見ながら昔この舞姫の一人を戀しく思つたことなどを思ひ出して居た。

なつかしきかないにしへの
とよわかひめの宮少女、
神さびぬるや老いぬるや
羽衣つけて舞ひし日は
われの心に今もうつれど。

かう書いて大貳の女の五節の君に送つた。夕霧の君は舞姫が戀しくてまた逢へるかと思つて居る所の近くへ行かうとしたが人が寄せ附けなかつた。美しい顔が目に殘つて戀人とわかれた心の慰みにこの

人を自身のものにしたいと思つた。舞姫はそのまま宮中に殘つて女官になる筈であつたが口實を拵へて皆一先づ自宅へ歸つた。典侍の職に空きがあるので惟光は女をそれに任官させたいと思つた。源氏の君もさうしてやりたいと思つて居ると云ふことを夕霧の君は聞いて殘念に思つても少し年でも行つて居たなら自分が所望して見るのであるがと思つて歎息して居た。その人の弟はまだ童であるが宮中へ上つたり二條院へ來たりなどして居て夕霧の君とも親しい。

『姉さんは何時御所へ行くの。』

『今年の内だと云ふことです。』

『顔が一番好かつたからあの人が私は戀しい。おまへなどは何時も見られるから好いねえ。私にもう一度見せてくれないか。』

と夕霧の君はその子に云つた。

『私だつて男の兄弟だと云つてあまり近くへやつてくれない位です

もの。あなたにお見せすることなんかとても出來ません。』

『さうかねえ。それでは手紙だけでも持つて行つておくれ。』

と云つて夕霧の君はその子に手紙をことづけた。こんな使をすると父がやかましく云ふのであるがと思ひながら主人の家の若樣を氣の毒におもつて姉の處へそれを持つて來た。女は年よりもませた心があつて手紙を貰つたことを嬉しく思つた。緑色の紙に書いた手紙を弟と二人で讀んで居る所へ父が來た。びつくりしたが二人とも隱すことが出來なかつた。

『何の手紙だ。』

と云つて父はそれを取つて讀んだ。

『馬鹿な使をしたのはおまへだらう。』

と云はれて男の子が逃げて行くのを呼んで、

『誰の手紙を持つて來たのだ。』

と惟光は云つた。

『殿樣の處の若樣のです。』

と云つて、それからその子は手紙を持つてくるまでの順序を話した。

惟光は急に嬉しさうな顏になつて、

『おまへと同年でも若樣はもうこんな大人らしいことをなさるぢやないか。』

と云つた。惟光はその手紙を妻にも見せた。

『この方々の思はれ者になるのだつたら私は喜んでさし上げるよ。殿樣は澤山の女に關係をおしになつたが、御自分の方から誰だつてお捨てになつたことはないのだ。若樣もさう云ふ質の人だ。私も幸福者の明石の入道にならうかな。』

などと惟光が云つて居るうちに姉も弟も其處には居なくなつてしまつた。夕霧の君は手紙も遣ることの出來なくなつた雲井の雁の君が

戀しくて月日が經つに隨つてどうかしてもう一度逢ひたいと思ふより外のことは思はないやうになつた。源氏の君は夕霧の君を同じ東の院に居る花散里の君の子にさせた。氣質の柔い人で子のないのを寂しく思つて居るのであるから、喜んで花散里の君はその世話をして居た。夕霧の君はうつくしくない第二の母を見て、心の持ちやうでこんな人でも捨てずに居られるのに、たつた一人の人に戀ひこがれて居ると云ふのは云ひがひのない自分だなどとも思つた。顏はどうでもこの母のやうな氣質の優しい人を自分も妻にすれば好いだらうとも思ふのであつたが、然し餘り醜い妻は顏を見るのが氣の毒になつて間が惡いだらうなどとも思つて居た。年の暮になつたが、今年は夕霧の君の春着ばかりをいろいろと宮は拵へておいでになつた。幾重ねも幾重ねも出來上つて居るのを見ても夕霧の君は嬉しいとも何とも思はない。

『正月にだつて參內しようとも思つて居ないのに、何故こんなにお拵へになるのです。』

『愚物な。年寄じみた死ぬのに間のない人のやうなことを云ふ。』

『年は取らないけれど、死ぬのに間のない人のやうな心持がする。』

と獨言のやうに云つて夕霧の君は涙ぐんで居た。雲井の雁の君のことを思つて居るのであらうとお思ひになつて可愛さうで宮も泣きたいやうな氣持におなりになつた。

『男と云ふ者はつまらない人でも氣位を高く持つて居なければならないものだのに、一人の女のことでくよくよと思つて居てはいけない。』

『そんなことを思つて居るのぢやありません。六位だと云つて皆が侮りますもの、參內するのも厭になるのです。お祖父さんがお出でだつたら、戲談にだつて私を侮る人なんかはないだらうと思ひます。

眞實の親ですけれどお父さんは私に隔てがある樣な氣がする。二條院へ行つても直ぐ歸すやうにおしになる。東の院でだけは傍へも寄れますけれど、それに西御殿のお母さんは優しくして下さいますけれど。』

と夕霧の君は云つて、また、

『親がもう一人生きて居て下すつたならと私はそればかり思ひます。』

と云つて涙の零れるのを紛らして居る孫が可愛さうで、宮は聲を上げてお泣きになつた。二月の二十日に陛下は上皇のおいでになる朱雀院へ行幸になつた。父帝の時の花の宴のことをお思ひ出しになつて院の陛下は源氏の君と昔のことをお話しておいでになつた。今日は名の聞えた詩人などはお呼びにならないで、大學の學生の勝れた人を十人お招きになつた。そして式部省でする試驗問題のやうな詩文の答文を作らせた。夕霧の君のためにさうはからはれたことであつた

らしい。陛下は皇太后がおいでになるのを訪はないのも惡いとお思ひになつて夜が更けたが歸りがけにその御殿へお寄りになつた。皇太后は嬉しくて堪らない御樣子であつた。

『昔のことは忘れて居るのでしたが、かうしておいで下さいましたにつけてもいろいろのことが思ひ出されます。』

とお云ひになつた宮は泣いておいでになつた。

『私も父や母に別れましてからは春と云つても面白く暮すことが出來なかつたのですが今日は誠に愉快でした。またそのうち參りませう。』

と陛下はお云ひになつてお立ちになつた。源氏の君も挨拶した。皇太后はこの陛下や源氏の君を咀つて思つた昔の自身のお心をあさましく思つておいでになつた。尙侍と源氏の君との間には今も文の行きかひがあるやうである。夕霧の君は行幸の日の詩文の成績がよく

て進士になつた。及第した三人の中の一人なのである。そして秋の叙任期に侍從になつた。源氏の君は住居を廣く造つて大井の人なども一緒に住ませたいと思つて中宮の元の家も交ぜて四町四方の邸宅を造らせて居た。式部卿の宮が來年五十におなりになるから、その賀宴をしたいと紫の君が用意して居るのを、同じことならば新しい家でさせたいと思つて源氏の君は普請を急がせて居た。春になつてからは賀宴に附帶した法事の日の僧達の裝束、來客に出す贈物などの支度で紫の君は一層急しくなつて東の院の花散里の君にも爲事を分けて賴みなどして居た。紫の君とこの人とは前から氣持よく附合つて居るのである。式部卿の宮の賀の祝ひの用意に一般の世間までが騷いで居るやうなのを宮は過分なことのやうに思つて喜んでおいでになつた。氣の寛い人であるがある一時の宮のお爲向が惡かつたために、一時は復讐的の態度を源氏の君は取つてゐたのであるが、天にも地に

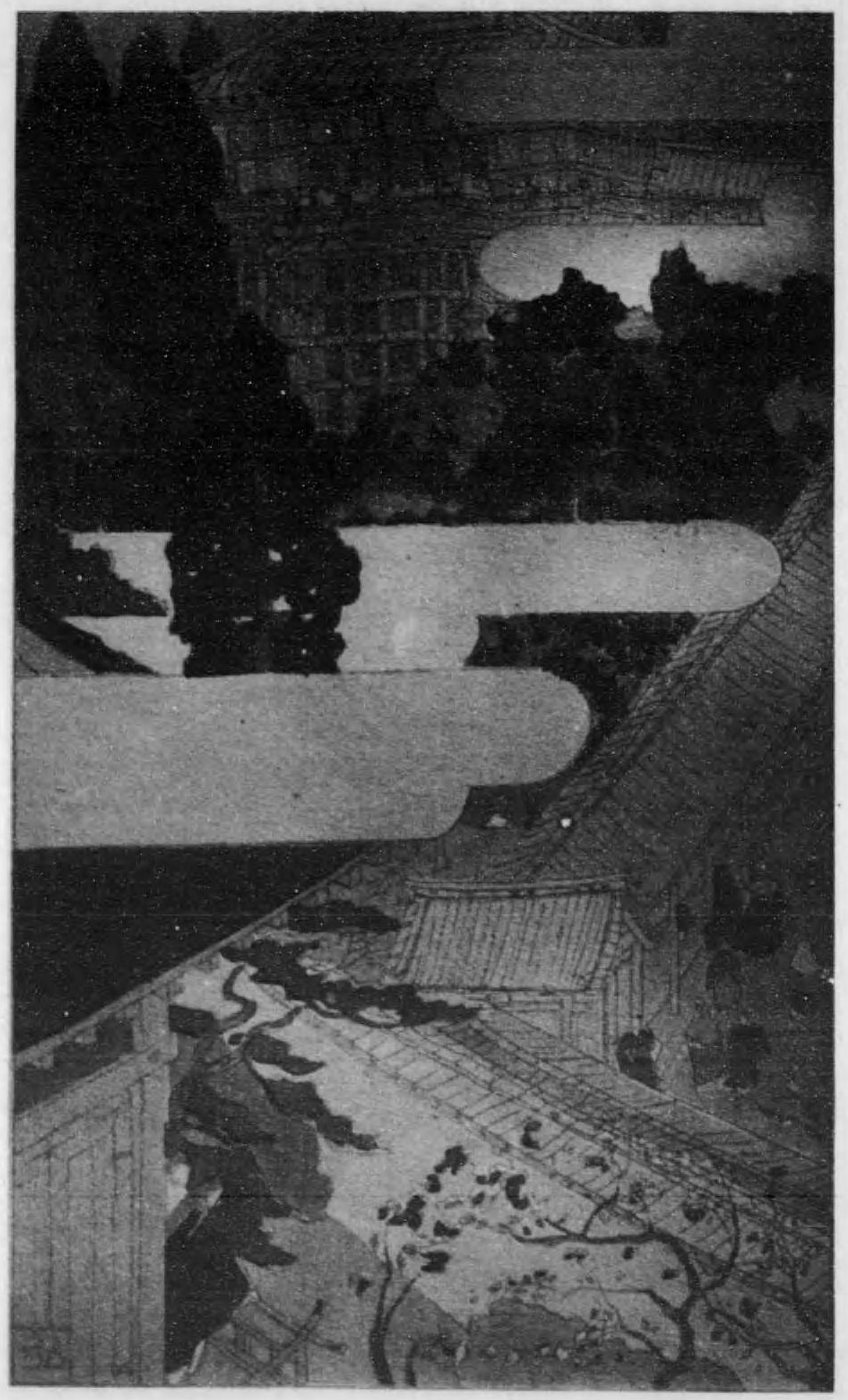
もない最愛の妻の實父でおありになるのであるから、そんなことを何時までも續けるものでもないのである。八月に六條院が出來上つた。西南の一廓は中宮のお家の跡であるから、そこは中宮のお住居、東南は源氏の君が紫の君と一緒に居る所、東北は花散里の君、西北は明石の君の住む所と決めてあつた。元あつた池や山も惡い所は崩して其處に住む人のそれぞれの好みに任せて庭を作つた。東南の庭は山を高くして春咲く花の大木をいろいろと交ぜて植ゑた。池も此處のは勝れて廣い。座敷に近い所には紅梅、藤、山吹、躑躅などに秋草や紅葉が交ぜて植ゑてある。中宮のおいでになる所の庭は、元の山に好い色をする紅葉をまた澤山植ゑ、泉を深く堀らせて、水の瀨の音を好くするやうな石を組ませなどした。瀧もある。そして秋草の原を廣々作つてある。丁度時節に逢つて盛りに咲いて居る。花散里の君の庭は見るから涼しさうな水が湧いて居て、此處は夏を主として作つてあるのである。

近い庭には竹が澤山植ゑてある。大きい森もあつて山家のやうな卯木垣なども態と拵へてある。撫子や薔薇の間には春の花草や秋草もないではない。其處の東は馬場にしてあつて矢來で廣く圍つて池の傍には菖蒲が茂らせてあつて突當りは厩である。もう一つの庭の北の端には藏が建て列ねてあつて其處と庭との隔てには大きい松が並べて植わつてゐる。雪の眺めに好いやうにとである。冬のはじめの霜の朝に優しい趣を見ようとする菊の垣根柞原などもあつて餘り名も知れない高山の木が澤山植わつてゐる。彼岸の頃にひつこしがあつた。一度にとも源氏の君は思つたがあまり大層になるので中宮は少しお延しさせた。紫の君の車には四位や五位の人が大勢供して行つた。花散里の君の列もそれに餘り劣らせてはない。夕霧の君の母になつて居る人であるからかうもあるべきことだと人も思つた。女達の部屋部屋などの行き届いた建て振りは外に見られないものであ

つた。五六日して中宮は宮中から出ておいでになつた。これは私人の儀式とは何と云つてもまた違つた光彩のあるものであつた。運の好い方と云ふばかりではなく、人品の清い尊い方で非常な聲望を持つておいでになる。九月になつて中宮のお庭の紅葉が美しくなつた。中宮は箱の蓋にいろいろの秋の花紅葉を入れて紫の君にお贈りになつた。

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のすさびにも見よ

こんなお歌がつけてあつた。明石の君は十月になつて移つて來た。



玉鬘

夕顔の君が死んでからもう十七八年になるのであるが、源氏の君は少しもその人のことが忘られなかつた。何程の女でもないが死んだ戀人にゆかりのあるものだと思つて憖然をかけて使つて居たから、右近はこの家の女達の中では古參の一人に思はれて重せられて居た。須磨へ源氏の君の行つた時に東御殿附の者も皆西御殿の方へ引き渡されたので、それからずつと右近は紫の君に附いて居た。紫の君にも愛されて居たが心の中では夕顔の君が生きて居たなら、六條院へ移轉してくる中の一方の主人であつて、明石の君程の威勢は持つて居るであ

らうと思つて始終悲しがつて居た。西の街に居た姫君の瑠璃樣もどうなつたか右近は知らなんだ。夕顔の君を五條の家から伴れ出して行つたのは自分だつたと云ふことは秘密にして置いて欲しいと源氏の君に云はれたので、憚かつて右近が音信をしないで居たうちに、瑠璃樣の保護者になつて居た夕顔の君の乳母の夫が太宰府の少貳になつたので丁度瑠璃樣の四つの歳にその一家は九州へ行くことになつた。その頃の頭中將だつた父君に瑠璃樣のことをほのめかして置かうかとも思つたが、夕顔の君のことを問はれたらどう答へてよいかと云ふ心配もあつたし、知つて瑠璃樣の田舍へ行くのを留めずに置かれることもないであらうから、せめて夕顔の君のかたみと思つて朝暮顔を見て居たいと思つて居る瑠璃樣にまで別れなければならないことになるのも悲しいことであつたから附いて居た人達が相談して身分の高い人の旅らしくもない小役人の家族同樣にして粗末な船などに乘せ

て伴れて行くのを悲しみながらそのまま京を立つた。瑠璃樣は母君を忘れないで、

『母樣の處へ行くの。』

などと途中途中で云ふのが堪へられない程可愛相で、乳母の娘等は泣いてばかり居た。行つてからも母君の在處が知りたいと誰も同じやうな願を神佛に立てて居た。偶にその人等は夕顔の君の夢を見るやうなこともあつたが、何だかもう死んだ人のやうであつたと覺めてから誰も云つて心細がつて居た。少貳は五年の任期の滿ちた時、京へ歸らうと思つたが誰の引きもない老いた小官吏が、競爭者の多い京で生活することの困難なのを思つて、多少勢力を扶植した地方に留まつて居る方が安樂で、つひ一年二年と上京を延して居るうちに少貳は大病になつた。危篤になつてからも病人は、十位になつて居た美くしい瑠璃樣を見ては、

『俺が亡くなつたら姫樣はどうおなりぢやらう。こんな田舍にお置き申したことも物體ないことぢやが、そのうちに京へお供してお父樣にお手渡ししようと俺は心で毎日その用意をして居たのぢやつたに死病にとり附かれたとは情けない。』
と云つて泣いて居た。三人ある息子には、
『姫樣を京へお伴れ申して世の中へお出し申さうと云ふことを考へてくれるのが大孝行ぢやよ。俺のために法事などは一切いらん。』
とくれぐれも遺言したのであつた。瑠璃樣の父親は誰であると云ふことは官舍の者にも知らせず、女が生んだ高貴な人の種の孫であるからと云ふやうに云つて、出來る限り大切に瑠璃樣をして居た少貳が俄に死んだのであるから、妻や女は自身等のことよりも瑠璃樣の身がどうなるかと心細くなつて、急に京へ歸らうと思ふのであつたが、硬骨な死んだ少貳は政敵も澤山持つて居たから、どんな復讐に途中で逢ふか

も知れぬと云ふ恐れがあつたので、一家はそのまま心ならない日を西の肥前の國で送つて居た。瑠璃樣は年が行くに隨つて死んだ母君よりも數層美くしい人になつて行く。父親の血統だと思はれる品の高い處もあつた。性質の上などにも缺點はない。こんなことを誰から聞くともなしに聞いて戀しがつて妻に欲しいと云ふ人が大勢あつた。無論さう云ふ人は地方の豪士小役人などであつたから、少貳の未亡人や娘は口惜しがつて、そんな穢らはしい話は聞くのも厭だと云つて居た。そして顏はよくても不具な女であるから、尼にしようと思つて居ると云ふことを態と云ひ觸らした。さうすると、
『少貳の孫は不具ださうだ。可愛相なものだ。』
と世間では噂した。此方から云つたことでも外の者がこんなことを云つて居るのを聞くと好い氣持はしない。厭な肥前を捨てて一日も早く上京したいと何につけても一家の者は思つて居た。然してその

うちに息子も女も土地の者と縁組みをした。心は京へ京へと思ふがかうなつて見ると京はますます遠い所になつて行く。二十程にもなつた瑠璃樣は自身の運を悲しんで佛の經文にばかり親しんで居た。隣國の肥後に强大な豪族があつて、當主は大夫の監と云つて三十位の人だつた。武張つた中に好色な心もあつて、美くしい女を多く集たいと云ふ望があつたから瑠璃樣のことを聞いて、どんな不具な所があつても好いから自分にくれと申し込んで來た。この女は結婚などと云ふことを嫌つてどうしても尼になると云ふからお斷りすると云ふ返事を聞いた大夫の監はさうかうして居るうちに尼になつてしまはれてはならないと思つたか家來を大勢伴れて國から出て來た。そして旅館へ少貳の息子達を呼んで、

『あんた方の盡力でお姫樣を俺が貰へたら、俺は嬉しいけに、あんた方にどんな事でもして報いるがねえ、三千四千の奴等もお貸しするけ

に、あんた方はこの國でどんなわが儘でも出來ようがねえ。同盟を作るんぢやねえ、大夫の監と同盟したら九州の中を肩振つて歩けるぢやけに。』

こんなことを云つて誘つた。暫くの間こそはそんなことは出來るものでないと息子達は思つて居たが、どんな後援でもしようと云ふ都合のいいことに動かされて二郎と三郎はその味方になつた。

『あの人に惡く廻られては自分等は實際立つ瀬がなくなる。いくら貴族の姫樣でもお父樣に捨てて置かれるやうな方はやつぱりこれだけの運よりないと諦めなきやなりません。あんなに云つて大夫の監に懇望されるのは寧ろ幸福だと思はなければいけませんよ。逃げ隱れしたつて駄目です。そんなことをしたらそれこそどんな目に逢ふか知れませんよ。』

などと二郎は憎いことを母親に云ふやうにもなつた。一番兄の豐後

の介だけは亡父にも劣らない程瑠璃樣に對して忠實な心を持つて居た。

『私はどんなにしても姫樣を保護しますよ。ともかくも至急に京へお供することにしませう。』

と云つて居た。女の同胞や母親は豐後の介一人を力にして居るのである。

大夫の監は瑠璃樣の處へ手紙を書いて持たせて來させなどもするのであつたが、ある日二郎と伴立つてこの家へ來た。肥つた背の高い男で、それ程醜くもないが無作法で、二郎を相手にしはがれた聲で盛んに話して居た。機嫌を損はせまいと思つて未亡人は逢つた。

『少貳はえらい方だつたさうぢやけに、おつき合ひを願はうと思うとるうちに、お死になすつて殘念でした。それぢやけにせめてこれからは特別な懇親におなり申したいと思つて來ました。此處にお出でになる姫樣は好い血統の人ぢやと聞いたけに、俺に頂いて御主人

とも思つて大切に致さうと思つて居るのですわ。あんたも餘り氣乘りがしなさらんやうぢやが、妾が幾人か居ると云ふのでもお聞きになつたけに、さう思はれるのか知れんが此處の姫樣を其奴等と一緒に俺はしやせん。姫樣は一人よりないお后のやうなものにしておくつもりぢやけ。』

と大夫の監は云つた。

『さう云つて頂くのは願つてもない幸だと私は思ふのですがね、どうしても結婚の出來る身體ではないと悲しがつて居るのを見ますと、運の拙い者だと私も諦めなければならんのですよ。』

『たとへ目が潰れて居ても足が折れて居ても大夫の監が癒してお見せしよう、肥後一國の神佛は俺の云ひつけに背きますまいよ。は、は、は。』

と得意になつて云つて居る。今日にでも瑠璃樣を伴れて行きたいや

うに云ふのを、

『三月に婚禮してはいけないとこの土地では云ひますから。』

などと一寸逃れのやうなことを末亡人は云つて居た。

『こんな和歌が出來ました。君にもし心たがはば松浦なる鏡の神をかけてちかはん。どんなものでせうかな。』

と大夫の監は鼻蠢めかして云つた。

『そんなことを仰つしやつても年が經つてお心持が變つた時、お誓ひなすつた松浦の神様がお恨めしくおなりになりませんかしら。』

『何ですと。』

と云つて大夫の監は刀に手を掛けてじりじりと寄つて來た。一寸口愛想で云つたことで腹を立てられて、末亡人は眞青な顔になつて居た娘達が出て來て大夫の監をやつと宥めて歸した。四月二十日頃の日どりで瑠璃様を迎へに來ると云つて大夫の監が一先づ歸つた間に瑠

璃様は豐後の介に助けられて船で逃げることになつた。末亡人も妹も來たが姉だけは子供も大勢になつて居るのであるから捨てて出ることも出來ない殘つて居なければならぬと悲しんで居た。長い間居た所と云つても立つて行くのに惜しい氣もしないのであつたが唯松浦の宮の前の濱の景色と姉娘に別れるのだけが誰も辛かつた。大夫の監が追つかけて來まいものでもないからと思つて豐後の介は船を早船仕立にさせた。それに丁度追手の風が吹いたので危い程早く船は進んで行つた。

『海賊の船らしい小いのが飛ぶやうにして漕いでくる。』

などと云つて居た者もあつたが、一行の者は海賊よりも大夫の監を恐しく思つて居た。攝津の川尻まで來た時誰もほつと息をした。妻も子も置いて來た豐後の介は船子の歌を聞いて涙を零して居た。大夫の監が跡の者にどんな復讎をするかも知れないのに、力になりさうな

家來も皆伴れて來たのを無分別だつたと後悔もして居た。夫に別れて來た妹の兵部の君も泣いて居た。京へは入つたが行く處がないので昔知つた人の家族の居る處を訪ねて當分其處に居ることにした。京の中と云つても九條であるから人らしい人も住んで居ない、商人や出稼人などばかりの居る處である。さうして秋になつた。心細いことは云ふまでもない。豐後の介も此處へ來ては水鳥が陸へ上つたやうなもので手の出しやうがない。家來なども見込がないと思つたのか、一人行き二人行きして皆本國へ歸つてしまつた。豐後の介は氣の毒がつて居る母親に、

『私のことなんかはどうでもよろしい。家來なんかはなくなつても構ひません。私等がどんな羽振の好い者になつても姫樣を大夫の監にとられては生きて居る氣もしないでせうからね。まあいいのです。』

と云つて慰めて居た。この人等は神佛に賴みをかけて瑠璃樣を伴れて八幡詣りをして、それから大和の長谷寺へも廻つた。四日目の晝頃に長谷寺の下の椿市の街に着いた。瑠璃樣と豐後の介とそれから武具を持つた家來が二人、下人や童が四五人、女達はあるだけの者三人、下女が二人、こんな手輕な旅人であるから宿をとつた山坊の主人の僧も好い顏はしない。

『外に待つて居る客があるのだが。』

こんなことを聞えよがしに云ふのを、辛く思つて聞いて居て。間もなくそれらしい一行が家の前を通るとその上にも泊らせようと思ふのか主人の僧は道で頭搔き搔き宿をすすめて居る。また宿を替へるのも大層に思つて、幕のやうなものを張つて、奧の方へ瑠璃樣を置いて、下の男女は表の方へやつて座敷を半分空けてやつた。後から來た一行は主人らしい女が一人で、外の大勢の男女は皆附人であつた。何方で

も遠慮をして居るので靜である。この後から來た女と云ふのは、瑠璃樣のことを毎日思つて居る右近である。この寺へは度度詣るのであるが徒歩で來たので疲れて横になつて居ると幕の向うで、

『これを姫樣にさし上げて下さい。膳などが誠に不都合で。』

と云つて居る者がある。右近は聞いて隣に居るのは自分等並の人ではないらしいと思つて、幕の下から覗くとさう云つて居る男の顏に見覺えがある。子供の時に見たのであるが、それが好加減な年になつて、色も黑く身體も大きくなつて居るから誰とは分らない。

『三條さん、姫樣がお召しになります。』

と云はれて出て來た女も知つた顏である。夕顏の君に長く使はれて居た者で、隱れ家の時にも附いて居た者だと云ふことが分ると夢のやうな氣持を右近はした。それではあの男が兵藤太と云つた人かと云ふ氣も附く。瑠璃樣がおいでになるのではないかと思ふと、少しも早く聞いて見たい氣になつて、召使に云ひつけて三條を呼びにやつたが三條は食事をして居て急には來ない。右近をいらいらとさせてやつと三條は出て來た。肥つた身體に田舍者らしい赤い着物を着て居る。

『誰方で御座いますか。九州に二十年も行つて居ました私を知つたやうに仰つしやるのは人違ひでは御座いませんか。』

『もつと近くへ來て私の顏をよく見てごらん。』

『まあ右近さんでしたわ。』

と云つて三條は手を打つた。

『何と云ふ嬉しいことでせう。何方から此處へお來しになつたのですか奥樣はどう遊ばしていらつしやいます。』

と疊みかけて聞く、

『乳母樣もおいでなの、姫樣は。』

と此方でも云ふ。

『姫樣も御成人なさいましたよ。まあ一寸。』
と云つて三條は彼方へ行つた。
『恨んでばかり居た方にお目にかかります。』
と云つて未亡人は出て來た。幕もとられ屏風もたたまれた。
『奥樣はまあどう遊ばしたのですか。夢にでもお出でになる所を見せて頂きたいと云つて願を立てて居たのですけれど。』
『奥樣はとうにお死れになつたのですよ。』
仕方なしに右近は辛い思ひをしながらかう云つた。未亡人も三條もその儘長い間泣いて居た。
『もう御參詣になつて宜しう御座います。』
と宿の主人が云ふので兩方の客は別れて別々に暗い道をお堂へ行つた。參籠の場所もよくない所に取られてあつた九州の一行を男だけは殘して右近が本尊に近い自身の間へ移らせた。

『源氏の太政大臣樣にお使はれして居るおかげで、私のやうな者でも巾が利くのですよ。』
と右近は云つて居た。自身の子にしたいと始終源氏の君の云つておいでになる瑠璃樣が、さう云ふことにおなりになつて幸運の向くやうにと云つて右近は祈つて居た。田舍の人が大勢參詣する。大和の守の細君も來た。すばらしい勢を見せて居るのを見て、三條が、
『大慈大悲の觀世音樣、姫樣を大貳樣の奥樣か、當國の大和の守樣の奥樣におさせ申して下さいまし。私どもも出世いたしたならお禮事を十分いたします。』
と云つて拜んで居るのが右近の耳に入つた。
『あられもないことを云ふ人。あなたは田舍者になつたね。あの頃の中將樣でも大したお勢だつたぢやありませんか。それに今では大臣にもなつておいでになるその方の姫樣を、地方官の人の奥樣に

したいなんかつて。』

『そんなことを仰つしやるけれど右近さん大貳様の奥様が彼地の瀧水の観音様へ参詣なすつた時の騒ぎと云つたら、お后様のお幸福にも劣らんやうでしたもの。』

と云つて三條は口の中でやつぱり以前の願ひを繰り返して云つて居た。九州の一行は三日籠ると云ふので、それ程のつもりでなかつた右近も一緒に居ることになつた。願文書きの僧が來た。

『何時もの通り、藤原瑠璃様のためにと書いて下さい。その人にこの頃逢ふことが出來ましたから、そのお禮も佛様に申し上げるつもりで居ます。』

と右近が云つて居るのを、瑠璃様は身に沁んで聞いて居た。

『それは結構でしたな。全く御祈禱の効ですよ。』

と僧は云つて居た。晝の間は右近の知つた外の寺の座敷へ行つて居

た。窶れた姿を見られるのを耻ぢるやうにして居る瑠璃様の美くしいのに右近は屢見蕩れて居た。

『私は思ひも寄らない高い所で御奉公することになつて、隨分美くしい人をいろいろと見ますがね、殿様の奥様はこんな方はないと思ふ位お美くしいのですよ。それに殿様の姫様のお美くしいことと云つたらありません。それは然し何も十分にされておいでになる上のことですが、この姫様がこんなにしておいでになるのに、そのお二方に劣つておいでになるやうにはお見え遊ばしませんよ。殿様は私等とまた違つて昔からお后様や女御様やその外の美くし人を數限りもなく御覧になつたのですが、それでも唯今の陛下のお母様のお后様と御自身の姫様とが眞實の美人と云ふものだと思ふと仰つしやいましたよ。私はお后様は知りませんし、姫様はお美くしくおありになつてもまだほんのお小いのですし、奥様に誰れが並ぶ者が

あるかと思つて居ますの、殿樣だつてさう思つていらつしやるのでせうけれど、まさか御自身のお口からさうは仰つしやれないのでせう。あなたは私のやうなものと添つて幸福者だなどと御戯談を仰つしやいますよ。眞實にあんなによく揃つていらつしやる御夫婦つてものはありませんでせう。その奥樣とこの姫樣が同じ程お美くしくいらつしやいます。』

と右近の云ふのを聞いて末亡人は嬉しさうに、

『さうですかねえ。』

を繰返して云つて居た。瑠璃樣は耻しがつて後の方を向いてしまつた。

『あなたの手からお父樣の大臣樣にお知らせすることが出來ましたら結構なんですがね。』

と末亡人は云つた。

『それもさうですけれど、私は源氏の殿樣の方へ姫樣がおいでになる方がよくはないかと思ひますの。』

右近がかう云ふと、末亡人は腑に落ちないやうな顔をして、

『太政大臣樣は結構な殿樣でせうけれど、そんな御立派な奥樣が幾人もおありになるのですから、そんなことよりも先にお父樣のお子にしてお貰ひしなければならないのですよ。』

と云つた。

『さうですね、まだくはしいお話をしませんでしたね。』

と云つてそれから右近は昔のことになつた源氏の君と夕顔の君との關係を末亡人に話して聞かせた。

『私からお話を申したので最初から、姫樣のことは御存じで、奥樣のかたみだと思つて世話がしたい、子が少いのだから實子を引き取つたのだと云つて披露しようと、それは親切に云つていらつしやるので

すよ。』

と云つて、また、

『眞實に私が智慧が足りないで姫樣におさせしないでも好い苦勞をおさせ致しましたねえ。あなたの旦那樣が少貳におなりになつたことは官報で知つたのですがね、姬樣も御一緒に九州へおいでになつたとは氣がつかないでせう。お暇乞ひに殿樣の處へお出でになつたお姿も一寸拜見したのですけれど、何ともその時は言葉もようかけませんでした。』

と歎息をするやうに云ふのであつた。此處は街の方へ向つた處で、あるから參詣人が山を登つて來るのがよく見える。直ぐ前を流れて居るのが初瀨川である。

『然しよくお詣りいたしましたこと、さうでないと何時お目にかかれるか分らなかつたので御座いますねえ。』

と右近は瑠璃樣に云つた。

『さうね、私もよく來たことね。』

と瑠璃樣はしとやかな大やうな調子で云つて淚を零して居た。どんなに顏が綺麗でも、田舍者らしくぎごちなくなつて居たら玉の疵であらうが、さうでないのが右近には嬉しかつた。夕顏の君はただたよよとした柔さ一方の美人であつたが、この人は上品な氣高い處が目に見えてあつた。右近は六條院へ歸つて來た。

『長く家へ歸つて居たぢやないか、獨身者も當てにならないねえ。面白いことがあつたらう。』

と源氏の君はからかつた。

『七日行つて居りましたけれど面白いことは何も御座いませんでした。旅をいたしまして妙な人に逢つて參りました。』

『誰』

右近は一刻も早く源氏の君に知らせたいと思ふ瑠璃樣のことを話さうとしたが、紫の君の前で云つて好いかどうかと躊躇した。後で耳に入ることであれば却て此處で云はないのは惡いであらうとも思ふのであつた。

『後程申し上げます。』

と云つて人が來たのを機會に右近は口を噤んだ。紫の君に劣つて居ないやうに瑠璃樣を思つたが、やつぱりさうでもないと右近は思つた。二十七八なのであらうが眞盛の花のやうな人はほんの暫く見ないで居るうちにまた幾段の美が加つたやうにも見えるのである。やはり順境に居る人と逆境の人とは違つた所があるなどとも思つて居た。源氏の君は横になつて右近に足を撫でさせながら、

『どんな人に逢つたのだ。えらい坊樣でも引つ張つて來たかね。』

と云つた。

『夕顏の君樣の姫樣で御座います。』

『さう。今迄何處に居たの。』

と源氏の君は眞顏になつて云つた。ありのままに云ふのは餘り見ともなく思つて、

『田舍においでになつたのださうで御座います。お附きの者などがやつぱし前の人達で御座いましたから分りましたので御座います。お亡れになつたお母樣の話が出ましたのでお氣の毒に存じました。』

『奥樣の前でそんな話をしては少し困るね。』

と源氏の君が云ふと、

『私は眠くて何も聞えませんよ。』

と云つて紫の君は袖で耳を押へた。

『美くしい人なの、母樣とはどうかね。』

『それはお綺麗でいらつしやいます。』

『誰程、この人ほど。』

紫の君をそつと見て源氏の君はかう云つた。

『奥樣のやうな、そんなことは御座いません。』

『馬鹿な男だと思ふだらう。自分の家内自慢なのだから。』

と云つて源氏の君はをかしさうに笑つた。そして、

『まあ私にさへ似て居れば安心だ。』

とこんなことを云つた。それからは暇があると源氏の君は右近を呼んでそのことについて話すのであつた。

『この家へ伴れて來よう、內大臣に知らせる必要もないだらう。澤山子はあるのだからね、其處へ行つたつて餘り引き取られ榮もしないだらうぢやないか、私の處では外に置いてあつた子が歸つて來たとさへ云つておけば好いのさ、私の子だと云ふと戀しがる男が澤山出來るだらうと思つて面白くてならない。』

と源氏の君は云つた。右近は願ひ事がかなつたやうに嬉しく思ふのであつた。

『夕顏の君樣があんなことでお死くなりになりました代りと思し召して、あなた樣が助けてお上げ遊ばせば罪亡ぼしにもおなり遊ばすで御座いませう。』

『罪を澤山にきせて居るね。』

と笑つて源氏の君は云ふのであつたが、目には涙がいつぱい溜つて居た。

『悲しい夢のやうだつた戀だと思つてね、右近、かうしていろいろの人を集めて居るやうだけれど、私はあの時程夢中になつて戀しいと思つた人は一人もあるのぢやないのだよ。大して私に思はれて居なかつた人がまあ生きて居るおかげで私の家の人になつて居るやうなものもあるのだよ。それだのにあの人のかたみに右近だけを見

て居るのは實際餘りもの足りなかつたのだ、立派なかたみをよく見つけて來てくれたね私は大滿足だ。』
こんなことも云つた。それから源氏の君は瑠璃樣に手紙を遣つた。衣類も數多く女達のものまで添へて送つた。瑠璃樣は目の覺めるやうな贈物を見ながら、これが眞實の親から來たものであつたならなどと思つて吐息をそつとついて居た。右近が來てすすめるが知らない人の中へ行くのが厭でもあつた。
『さうして御立派にさへなつておいでになれば、お父樣はいさこさなしに御自身のお子樣だとお云ひなさいますよ。親子の緣は深いのですもの私のやうな者でもお目にかかりたいと思つた一心が通つたのですから双方御無事でさへおありになれば、もう何時でもお逢ひになれますのですよ。』
右近は宥めるやうにかう云つた。源氏の君は見苦しくない瑠璃樣の

返事の手紙を見て何となく氣が落ちついた。六條院の中の東の家の西御殿が源氏の君の大書齋になつて居るのを、それを外へ移して瑠璃樣を其處に居らせようと源氏の君は思つた。花散里の君は氣の好い人であるから、さうして仲よく暮すのも好いであらうなどとも思ふのであつた。源氏の君は瑠璃樣を子だと云つて引きとることの決つた後で紫の君に瑠璃樣は實は內大臣の子であることを話した。昔の夕顏の君の話もした。
『あなたは今迄隱くしていらつしつたのですわね。』
と紫の君は恨めしさうに云つた。
『生きて居て今も戀が續いて居る人のことなどなら、あなたに隱くしておくのは惡いけれど、死んだ人のことだもの、こんな機會でもなければ話が出來ないぢやありませんか。』
と源氏の君は濕つぽい調子で云つた。そしてまた。

『私は何も戀を漁つて歩かうと思つた男でもないのだけれど、運命が妙に私を多勢の女の處へ引き廻したものだから、戀しいともそれ程戀しくないとも、女の人についていろんな感情の經驗をしたけれど、あの人程夢中になつて可愛いと思つた人はありませんよ、美人でしたよ。趣味などはそれ程高い人でもなかつたけれど、生きて居たら私は北の家に居る人位には今でもするでせう。』

『あら、さうぢやないでせう。いくら何でもさうぢやないわ。』

と紫の君は云つた。明石の君を過分な愛を得て居る妬ましい人だとやつぱり思つて居るのである。前に座つて無邪氣にこの話を聞いて居る姫樣を見ると、こんなに可愛く思ふ子を生んだ人であるから、紫の君がさう思ふのも最もである、或はさうであるかも知れぬと源氏の君は思つた。これは九月のことである。瑠璃樣は一先づ右近の家へ移つて、其處で女達の人數などを揃へて十月に六條院へ來ることになつ

た、源氏の君はこれから相住する花散里の君に、

『ずつと以前關係のあつた女がね、私に知らせないで田舍へ行つて暮して居たのですが女の子が一人あつたもんだから、捜がさせたのですが知れなかつたのが此頃になつて居所が分つたので引き取ることにしました。もう母親も死んで居ないのです。中將もあなたの子にして貰つたのだから、今度もまたあなたの世話にならうと思つて居るのです。田舍で大きくなつたのですから、何も知らないでせうが、よく敎へてやつて下さい。』

かう云つた。

『そんなことがおありになつたのをちつとも知りませんでしたわね、姫樣がお一人限りで寂しいことと思つてましたのですわね、好いことですわね。』

と例の大やうな人は云つて居る。

『母親だつた人は誠に氣の好い人だつたのです。あなたも優しい人だから好いと思ふ。』

『一人だけの世話では直實にまだ暇過ぎるのですもの、賑かになつて結構ですわ。』

花散里の君は嬉しさうにかう云つて居た。然しまだ女達は源氏の君と瑠璃樣とは親子であると云ふ假の事實も、眞實のことも何も知らないのであるから、源氏の君の一人の愛人が來るのだと思つて居る。

『此方の西御殿へ誰方かをお置きになるのですつて、此方の奥樣を古物あつかひになさるのですわね、口惜しいこと。』

などと語つて居た。右近が隨いて居るのであるから、耻しくない用意を調へて瑠璃樣は移つて來た。夜になつてから源氏の君は出て來た。光源氏などと云ふ噂は古くから聞いて居たのであるが目のあたりに見た少貳の未亡人や娘の兵部の君は、美くしさに怖えたやうに身體を

慄はせて居た。

『戀人の所へ來たやうな暗い灯ぢやないか。』

と源氏の君は右近に云つて、そして、

『親の顔は見たいものでせう。さうぢやないの。』

と云つて瑠璃樣の傍に立てた几帳を手で除けた。耻しいので下を向いた瑠璃樣の姿は惡くなかつた。

『もう少し灯を明くした方が好い。』

と源氏の君が云ふので、右近は少し大きくした灯を近い所へ持つて來た。

『耻しがる人だね。』

と源氏の君は云つた。實子を見る心持で居るのである。

『どうなつたかと思つて、長い間私は氣に懸けて居たのです。夢のやうな氣持がする。』

と云つて、源氏の君は涙をそつと袖で拭いた。これは古い古い涙である。十七年の前某院の暗い夜に流れた涙である。幾歳になるなどと年を數へて、

『こんなに長い間逢はないで居た親子と云ふものはあるものではない。』

などとも云つた。

『もう子供ぢやないではありませんか。別れて居た間の話でもしたら好いでせう。』

かう云はれて、

『お話の出來るやうなことも御座いませんもの、あるかないかに生きて居たのですから。』

と瑠璃樣は云つた。夕顏の君にそつくりな聲であつた。源氏の君は右近にいろいろなことを注意して歸つて來た。

『田舍者になつて居て氣の毒なやうな思ひをしなければならないのかと心配もしたけれど、さうぢやなくて此方が却て耻しくなる位の人だから嬉しかつた。私にそんな美くしい娘があると若い人達に早く知らせたいものだ、兵部卿の宮さんなどと云ふ風流男が私の處へ來ると、眞面目一方な顏をするより仕方がなかつたのが、變ると思ふと樂みでしやうがない。』

と源氏の君は紫の君に云つた。

『をかしいことを樂に遊ばすのね。妙な親ね。怪からんことですよ。』

と紫の君は云つた。

『私はそんなことがして見たくて仕樣がなかつたのだもの、今だつたらあなたをさうしますよ。』

と云つて源氏の君は笑つた。紫の君は顏を赤くして默つてしまつた。暫くしてから源氏の君は硯を引き寄せて、紙に、

忘れえぬ昔の戀の、
　美くしき筋にこそあれ。
ゆくりなく今日見る君よ、
　玉かづら絶えぬゆかりの、
　なつかしく身にも沁むかな。

こんなことを書いて居た。云つて置く、源氏の君はまだ三十五である。源氏の君は夕霧の君にも、
『おまへの姉樣が一人あつたのだが、歸つて來て居るから仲よくおつきあひ。』
と云つて居た。夕霧の君は玉鬘の君の方へ來て、
『役にも立たないでせうが、御用があつたら云ひつけて下さい。おいでになる時もよく知らなかつたものですから、お迎ひにも上りませんでした。』

と云つた。眞相を知つて居る女達はこんな挨拶をして居るのが氣の毒でならなかつた。世界の善美を盡したやうな家に住んで、繪に描いたやうな美くしい人等が瑠璃樣の親や同胞なのであるから、三條も大貳などは何でもないとやう〳〵氣が附くやうになつた。忠義者だと云つて右近の賞めそやす豐後の介も姫樣附きのこの家の家來の一人になつた。近よることなどは思ひも懸なかつた源氏の君の家に毎日出仕して下役の指圖などをする身になつたことを喜んで居る。歲暮の春拵へでいろいろの着物が出來上つて裁縫係りから紫の君の前へ持つて來る。好みが上手であるからどれもこれも美事なものである。縫つてない反物も澤山添へられて、それが皆源氏の君の思ひ人達に分たれるのである。
『よくお顏にお似合になりさうなのを、あなたが選つてお上げなさいな。』

と紫の君は云つた。源氏の君は笑ひながら、

『あなたは人が惡いから、私にそんな事をさせて置て、皆の顏を想像して見ようと思つて居るのだらう。肝心の奥樣はどれにするのです。』

と云ふのであつた。

『一番惡い女の着て似合ひさうなもの。』

『それではこれが好いだらう。』

と云つて源氏の君の選んだのは、紅梅色の浮模樣のある薄紫地の勝れて華美な小袿である。薄色に緋を重ねたのが小さい姫樣の春着お納戸色の凝た織物の小袿に、紫を帶びた赤を重ねたのが花散里の君。燃えるやうな色の赤に欝金の上着をそへた一揃ひは玉鬘の君にと云つて源氏の君の選つたものである。紫の君はそれを見て、内大臣が花やかな美くしさに滿ち滿ちたやうな顏で艶なところのないそれに似た人なのであらうと瑠璃樣のことを押し量つて思つて居た。そしてそ

の美が源氏の君の心に深く映つて居ると云ふことも考へられた。源氏の君は紫の君の心の中の穩かでないことを知つて、

『こんないたづらはもうよした方が好いね、貰つた人が腹を立てるだらう。どんなに着物に種類があつても人の顏程の變りやうはないのだから、やつぱり選るのが嘘になるから。』

かう云つて、態と美くしい人に似合ひさうな緑地に唐草を織つた艶なのを末摘花の君のにすると云つた。さうして自身でもをかしいと見えて笑つて居た。梅の枝に蝶と鳥の飛んで居る地模樣のある氣高い白地の小袿に赤を重ねたのが明石の君に選ばれた。紫の君は妬ましい心持がした。空蟬の尼君には青黑い地の織物の小袿に、源氏の君自身のに仕立てられて來て居た黄の着物、それから桃色の着物などを添へて贈つた。元日に皆着るやうにと云つてやつたのである。見に廻らうと思ふ源氏の君の心であるらしい。

初音

今年は正月の元日が子の日である。夕方源氏の君が行くと小い姫樣附きの女の子供や下女は面白がつて前の山で小松を拔いて居る。姫樣の傍に居る若い女達も嬉しくて溜らないやうな晴々しい顔を並べて居た。明石の君から美くしく造つて籠に入れた菓子や料理が贈つて來てあつた。鶯をとまらせてある五葉の松の美くしい作り物の枝に、

年月を松に引かれてふる人に今日うぐひすの初音きかせよ

こんな歌を書いて附けた物も來てあつた。その人の心を思つて源氏

の君は賑かな祝日の家の中に居るやうでもなく濕つぽいしんみりさした悲しみを感じるのであつた。

『返事を書いたら好いでせう。どんなに拙くてもあなたの遠慮する人ぢやないのだから。』

と云つて、源氏の君は硯を引き寄せて筆を撰つたりなどして姫樣に手紙を書かせて居た。この愛らしい子と引き分けてもう足掛六年程も逢はせないで居る罪作りなことを、何故せねばならないのだらうなどと思つて心で泣いて居た。源氏の君はそれから花散里の君の住んで居る所へ行つた。庭も座敷も夏を主にして拵へた所であるから、期には合はないがそれが却て靜かな趣きを作つて、いかにも上品な人の住んで居る處らしい。年が經つに隨つて二人の間に心の隔てが無くなり睦じさが加つて行くのであるが、一方では夫婦の情から兄弟の清い愛に移つて來たやうでもある。お納戸色の織物の袿は一層この人を

淨しい姿に見せる好みであつたと源氏の君は思つた。髮なども近頃は目に立つて薄くなつた。

『好いものでもないが髮に髢を入れて見たらどうです。私ぢやない外の人だつたらこの頃のあなたを見たら厭になる程毛が薄いよ。それでも私は何とも思はないし、あなたもまた頓着して居ない。』

などと源氏の君は云つて居た。去年中のことを思ひ出していろいろと話し合つた後で、其處の西御殿の玉鬘の君の處へ行つた。まだ小道具などが間に合はないであつたりして、整ひ切つてはないが座敷廻りが清らかに體裁よく飾つてあつた。若い綺麗な女達も澤山居た。瑠璃樣は何と云ふ美くしさかと見た時の人の心を強く引く顏附きであつて、華美な山吹色の上着がよく似合つて見えるのである。苦勞した間に少し少くなつた髮が、上着の裾にはらはらと幾筋かに分れて懸つて居た。影と云ふ暗いものが全體に無いやうな、若い女神のやうな威

嚴と花やかさを感せしめるのであつた。この家へこの人を迎へた喜びが今更のやうに溢れる程源氏の君の心に湧いた。こんなことから戀の芽が生えないものでもない。肉親の中のやうにかうして源氏の君に對して居るものの、思つて見れば自分は何になのであらう、お伽話のやうにこの知らぬ富貴の家へ來て女だと大切がられて居ると思つて、玉鬘の君が恥ぢて顏を下向けて居るのが誠に美くしい風情である。

『私の居る方へも遊びに來て彼方の女王にも逢つたら好いでせう。琴なんかを此頃習ひ初めた子供も居ますから、あなたも一緒に教へてやつたりなどすると慰みになるでせう。心の置けるやうな人では女王はないから。』

と源氏の君は云つた。

『何でもお指圖して頂く通りにいたします。』

と柔しい聲で瑠璃樣は云つて居た。源氏の君は暗くなり掛つてから

北の明石の君の處へ行つた。廊下の戶を開けると淸い薫物の香が漂うて居て、何處よりも一番氣高い心地を起させる住ひである。居間へ入つたが明石の君は見えない。品の好い小說が五六冊出してあつて、支那錦の緣をした座蒲團の横に一絃琴を置いて、面白い形の火鉢に燒べた香が紫色の細い煙を立てて居た。机の上の紙には手習ひのやうに書き散した墨の跡がある。誰にも違つた流の手で美くしくもあつた。姬樣から返事が來たのが嬉しかつたと見えて、

珍しく花のねぐらに木傳ひて谷の古巢をとへる鶯

と云ふ歌が書いてある。梅の花咲ける岡邊に家しあれば貧くもなし鶯の聲こんな古歌も書いて自身の心を慰めようとして居るのが源氏の君は可愛想でならなかつた。筆をとつてその横へ何と云ふことなしに歌や字を書いて居ると、其處へ明石の君が出て來た。良人と云ふよりも主人に對するやうな禮儀をとつてつつましやかに座つて居る。

白い袿に懸つた艶の好い髪が少し此頃薄くなつたのも却てなまめかしく見えるのであつた。正月早々紫の君に恨まれると思ひながら源氏の君は此處で泊つた。宵のうちにその事がもう噂になつて六條院の隅々まで聞えたから、花散里の君の方でも女達が妬しがつていろんなことを云つて居た。紫の君附きの者は云ひやうもない大侮辱を頭上に加へられたやうに云つて口惜しがつて居た。源氏の君が夜の明けるか明けぬ位の時に歸つたのを、こんなにしなければならないのかと明石の君は跡でやつぱり味氣ない思ひをして居た。泊めた女を生意氣な失敬な者と思ひ、自身を恨んで居る紫の君の心は源氏の君によく分つて居るから、

『昨日は方々廻り歩いて疲れて、終ひに行つた處で一寸横になつたまま眠つてしまつた。迎ひの者でも遣してくれたら起きて歸つてくるのだつたのに。』

などと云ひ譯をした。

『さうですか。』

と云つた切り紫の君は默つて居た。二日は客を招待してあつたので朝から立ち歩いて仕度を家來に云ひつけなどして、きまりの悪さを源氏の君はまぎらして居た。東の院に分れて居る人等は繁々源氏の君に逢ふことは出來ないが、その外には何の不足も不滿もない安らかな日をそれぞれ送つて居た。佛信心を專念にする者、文學に身を入れて居る者もあつた。少し暇になつた八日頃に源氏の君が來た。末摘花の君は身柄が身柄であるから、立派な正妻の一人と世間で認めるやうな體裁だけは何時も源氏の君は繕つて居た。昔長くて澤山あつて美事だつた髪も年々少くなつて、その上白い筋も交つて見えるやうになつて來た。ちつと見るのが氣の毒で源氏の君は目をなるべく外すやうにして居た。緑色は厭なものであると云ふ氣がむらむらと源氏の

君の心に湧いた。柳色が惡いのではなくて着て居る人が相應せぬ人であるからそんな氣のしたのであることは云ふ迄もない。艶のない黒味勝ちな練の赤を二枚着た上にその織物の袿を掛けて居るだけの姿は寒さうでならない。下へ重ねる袿はどうしたのであらうと源氏の君は思つて居た。鼻の赤さが際立つて惡感を起させるのも今初まつたことではないと源氏の君は歎息して居た。禮儀を立てるやうに見せて几帳の切を態と眞直に直したりなどして見ない工夫をするのであつたが女は自身そのものをそれ程恥ぢて隱さうともしない。良人とも親とも思つて居るやうに馴れ馴れしく慕しがるのが可愛想で、この人を親切に世話してやることが何にも勝つた善事であると云ふ觀念も起るのであつた。末摘花の君は話する聲なども寒さうに慄へて居た。見かねて、

『あなたの着物の事なんかをお世話する女は居ないのですか。客が來ると云ふのでもないこんなのん氣な家は容子なんかはどうでも好いからいくつでも着物を重ねて着るに限りますよ。』

と源氏の君は云つた。さうすると氣が附いたやうにをかしさうに笑つて、

『醍醐の兄樣の方から春着の仕度を頼まれたものですから暮の内に私の着物なんか縫はれずじまひになりましたの。皮の下着も兄樣に持つて行かれたので寒くつて寒くつて。』

と云つた。

『皮の着物なんか着ないでも白い絹の着物は下へ何枚重ねても差し支へないものだからお着なさい。私はいろんなことがあるものだから忘れて居ることもあるんですから、いくらでも入用のものは持つて來いと云つて遣して下さらないと困る。』

などと源氏の君は云つた。此處では生眞面目過ぎた人のやうに源氏

の君はなつて居るのであつた。それから空蟬の尼君を訪ねに行つた。遠慮深く一つの御殿の主人らしくも見せないで、あらかたを佛樣をまつる用に使つて、小い座敷に自身は住んで居る。青味を帶びた黑の几帳の傍に座つて居た。袿も同じ青鈍であるが、下へは薄紅などを重ねて着て居るのが艶に見えるのであつた。源氏の君は淚ぐんで、けれど

『私とあなたの戀は終始悲しい運命に支配されて居ますね。これだけの緣はわづかにあるのですね。』

『わづかこれだけだとかうして居ることをさう輕々しく私は思ひませんの深い因緣だと思ふ位で御座います。』

『私はあなたを罪に落した昔の報いが恐ろしくて、佛に何時もお侘びして居るのですよ。今ではあなたも私の本心が分つたでせう。何方かと云ふと私の戀などは淸いものでせう。もつと穢い戀を持つた男もあつたでせう。』

繼子の河內の守に橫戀慕された當時の苦しみを知つて居るやうに源氏の君に云はれて尼君は耻しく思つた。そして、

『こんな姿になつてあなたにお逢ひして居るのがひどい報いですわ。』

と發作的に云つて、わつと泣いた。

胡蝶

三月の二十日過ぎである。六條院では新造船の船下しの宴が張られた。歸つて來て居られる中宮の若い女達を滿載して、龍頭鷁首の船は西の方から山を廻つて、遠近に櫻や藤や山吹の盛りに咲いた南の庭の大池に浮んだ。紫の君附の女達はその池へ突き出た離座敷に集つて居た。水の上を終日彼方此方と漕ぎ廻つて遊覽した船の女達は、管絃樂の初まりかかつた日暮れ方に、その座敷の下で船を止めて上つて來た。庭には篝が多く點されて青い苔の上で幾十番の舞を夜の明けるまで、引き代り引き代り貴公子が舞つた。驕樂の家の六條院も若い

人達の戀の對象にはならなかつたのであるが今ではさうではない。戀人娘盛りの姫樣が降つたやうに出來たのであるから、婿になりたい、戀人にしたいと心をときめかす者が來賓の中に幾人もあるのであつた。好い地位に居る人、資格のあるのを自信して居る人などは、中に人を立てて公然と申し込んだりもするのであつたが、まだ若輩だと誰にも思はれるやうな人は、はかない片戀をつくつて獨りで胸をこがして居た。眞相を知らぬ內大臣の子息の中將などもその仲間の一人であつた。兵部卿の宮は源氏の君の弟で先帝の皇子であるが、夫人を亡くされて三年程獨居して居られるのであるから、むきになつて瑠璃樣を御自身のものにしようとして居られるのであつた。 今日は中宮の御殿でお催しの佛事の初めの日であるから、徹夜した人達は正裝に仕替へて晝過ぎに皆その方へ行つた。 源氏の君も行つて聽講の座に着いて居た。紫の君から佛前へ捧げる花を持つて、蝶と鳥の姿をした童侍が八人船

に乘つて行つた。 鳥は銀の花瓶に櫻を差して持ち、蝶は金の花瓶に山吹を入れて持つて居る。 風が吹いてその櫻が船の上で白い花を散して居る。 廣い池の霞んだ中からその船が出て來た風情は誠になまめかしいものであつた。

花園の胡蝶をさへも下草に秋まつ蟲はうとく見るべし

と云ふ紫の君の歌を夕霧の君が持つて來た。 これは去年の秋の紅葉の返報であらうと中宮は微笑して見て居られた。 玉鬘の君は正月に紫の君と逢つた後は双方親密に附き合つて居た。 縁組の相談を源氏の君はいくつも聞くのであつたが、こんなことは瑠璃樣次第で自分の決めるべきものでないと思つて居た。 實父の內大臣に知らせて自分もいつそ瑠璃樣を得ようとする男の位置に立たうかなどと、こんなことを思ふこともあつた。 夢にもそんなことを知らないで姉だとばかり思つて居る夕霧の君は、よく瑠璃樣の處へ來て簾位を隔てて話をし

て行く。そして眞實の弟である内大臣の息子達は、夕霧の君の手蔓で戀の近道を歩かうと思つて、一緒に出て來ることなども往々あつた。瑠璃樣は早く父に逢ひたい兄弟に名乘り合ひたいと始終思ふのであるが色にも出さないで居た。瑠璃樣の處へ來る男の手紙が次第に殖えて來たのを、豫期して居たことであると源氏の君はをかしくて、間があると來てそれを讀むのであつた。返事して好いやうなのには返事を書くやうにと云つて源氏の君が勸めるので玉鬘の君は困ることもあつた。いらいらした戀の心がよく現はれて居る兵部卿の宮の手紙を見て源氏の君は面白さうに笑つて居た。

『この宮さんとは兄弟の中で今日まで一番仲よくして來たのだけれど、戀の方の打ち解け話などを若い時からどう云ふものか聞く機會がなかつたが、今日になつてこんなものを私に見られるとは妙なものだ。同情すべき文ぢやありませんか、返事を是非お書きなさい。

今の世の中で氣の利いた女の文の取り遣りをする相手はあの宮さん以外にはないと私は認める。』

と云ひながらまた右大將が心を籠めて書いた文を見ては、

『眞率な人はやつぱり眞率な戀をするものだ。』

などと云つて賞めもした。薄藍色の紙に書いて小く折つて結んだまま解かれない手紙がある。開けて見ると字も綺麗で文章も美くしい

思ふとも、愁ふとも、
君は知らじな、
病むことももとより知らじ、
死なんともやうやく書けど、
なほ君は知らじ、心を。

こんな詩も書いてある。

『これは誰のですか。』

と源氏の君が問うたが瑠璃樣ははつきりとも答へない。右近を呼んで、

『手紙が來たらね、おまへ達も拜見して、返事をした方が好いと思ふ人だつたら、お書きになるやうにお勸めするのだよ。男に操を蹂躪されたために、止むを得ないで起る醜い結婚は、あれは男ばかりが惡いのでもないのだ。どんなに情を盡して手紙を遣つても、返事一つ貰へないと云ふそんな場合になつてすることなんだ。別に差し支へのない自然界のものについてのその時々の感情などを書いてやるのは、貰つて嬉しいものであるし、その人が他人の妻になつたからと云つて恨みの起るものでもない。云はないでも好いのに男の心が解つたやうなことを云つて置くのは、後で考へて飜弄されたと思はれても仕方がない。冷靜を缺いだ女は後悔が多いと云ふのは眞實だ。然し宮さんや右大將は輕卒な考へでこんな手紙をお送りになるのぢやないのだから、ともかくも穩かな返事をする方が好いだらうと私は思ふ。その外の若い人達のはおまへ達の考で眞心からの戀の多い少い、熱心の度の強い弱いによつて相當な返事をお書かせしたら好い。』

など源氏の君は云つて聞かせて居た。石竹色の着物に薄色の袿を着た瑠璃樣は、去年の秋初めて見た時の唯大やうなだけのとりなしではなく、氣の利いた律々しい容子が少なからず加つて一層花やかに美しい人になつたやうに見えるのであつた。この人がいよいよ人の妻になつたら殘念な氣がするであらうと源氏の君は思つて居た。右近は親とするのには餘りに若い美くしい源氏の君を眺めて夫婦であつたら丁度似合つてお見えにならうなどとそんなさかしらなことを心で思つて居た。そして先刻の文を、

『それは內大臣樣の中將樣ので御座います。』

と右近は云つた。

『確りとして情のある文を書くと思つたらあの人なのか、まだ若い人だけれど落着いた靜かな人で、もつと上の官吏の中にでもあの人と並ぶ人物は一寸少いやうだ。』

と云つて源氏の君はまたその手紙を取つてよく見て居た。

『內大臣に知らせるのは瑠璃樣が何々夫人となつてからの方が好いと私は思つて居る。そこでいよいよ人選だがね、瑠璃樣はどう思ひますか、宮さんは獨身者のやうでも、通つてお行きになる處が隨分お有りになるやうだし、妾と云ふ厭な名のものがお邸に居るのも一人や二人では無いと云ふことだから、その中へ入つて行くのには餘程覺悟が入りますよ。見て見ぬ風をする心持になれば好いが、さうでなくて嫉妬が起つて來れば男の愛情を自分に繋ぐこともまたむつかしくなるからね、右大將は長く一緒に居る細君が自身より年の上

の人でもあるから、それがもう此頃では厭でならないで別の細君を搜して居るのだが、これも煩さいことの附きまとふのは云ふまでもないことだから、私もこの二人の中で決めなければならないと云ふことだつたら裁決に困る。こんなことは親にでも思ふことがよく話せないと云ふが、瑠璃樣はもうそんなに若い人でもなし、自身で決めて私に云つて呉れたら好い。私をお母樣だと假に思つたら好いでせう。』

『母と云ふものはどんな心持になつて話の出來るものか私にはそれも分らないのですわ。』

と瑠璃樣は云つて居た。最もなことだと可愛想に思つて源氏の君は歸つた。眞實の親であつても小い時から一緒に居なかつたりしてはこれ程の親切を子に見せてはくれないであらうと、小說を讀んで細い人情が幾分合點出來るやうになつた瑠璃樣は、源氏の君の情深い心に

報いたい、その人にだけは隱した心などは持ちたくないなどと思ふのであつた。源氏の君は可愛くてならないで紫の君にも。

『どうしてこんな人が出來たかと思はれる位瑠璃樣は圓滿な女らしい人だ。母親だつた人は氣立が柔い一方ではがゆいやうな處もあつたが、あの人はさうでもない。』

こんな風に賞めて話して居た。

『あなたに餘り賞めて思はれるのは却て危險なんだけれど、何んにもお知りにならないであなたを信じていらつしやると思ふと、お氣の毒なやうな氣もしますわ。』

『危險つて何が危險なんだらう。』

『危險ですとも私もあなたに上手に騙されたと思つて口惜しかつたことがあるのですもの。』

と紫の君は笑ひながら云つて居た。疚しい處のないでもない源氏の

君は、心を見透かされるやうに思つて外の話しに紛してしまふのであつた。間違つた物思ひをして居る自身の心を憎みながら、氣になるものであるから玉鬘の君の御殿へばかり源氏の君の足は向くのであつた。初夏の雨の上つた後で、楓や柏が若葉を繁らせた枝を心地よく伸して居る庭を見て、ふとまた瑠璃樣が戀しくなつてそつと行つた。横になつて手習ひなどをして居た瑠璃樣は起き上つて恥しさうに頬を染めた。その顏は夕顏の君その儘のやうに今日は見えた。

『あなたのやうにお母さんによく似た人もあるのだね。中將などは死んだ母親に何處一つ似て居る處と云ふものがないのだから、皆そんなものかとも私は思つて居たけれど。』

となつかしさうに源氏の君は云ふのであつた。暫くして、

『戀しい戀しいと忘れたことのない人と同じ人を見るんだから、私はもう自身の心を制することも何も出來ない。』

と云つて源氏の君は瑠璃樣の手を取つた。こんなことに初めて逢つて驚きながら何も解することが出來ないで居るやうに、

『母によく似て居ますから、また私も短命で死ぬのでせう。』

と大やうに答へて居た。それでも顏を膝に附けて身を守る用意はして居た。いい程に肥えた柔かな瑠璃樣の手を放さないで源氏の君は今迄隱して居た戀を少しづつ身に沁むやうな聲で話し出した。女はあさましくも恐しくも思つて慄へて居た。

『そんなに疎ましがらないでも好いではありませんか。私はこんなに思つて居る心を上手に隱すのも苦心の多いものだつたのですよ。あなたに戀をして居る誰の熱情にも私は負けない。』

とも云つた。遠慮して女達が少し遠い處へ行つたのを見て源氏の君は上着をそつと脫いで瑠璃樣の横へ寢た。愛されないであつても實の親の傍へ行つて居たなら、こんな憂目には逢はないで濟んだものを

と思ふと隱さうとしても涙が流れて出るのを見て、

『私はこの上何も無法なことをしようと思つて居るのぢやない。忍び餘つた心だけをあなたに話しただけだ。そしてあなたと居ると昔の戀の心持になれるのです。私の心は唯昔の人だと思つて戀をするのだから、あなたもその時だけは昔の人になつて私を慰めるやうなことを云つて居てくれれば好いのです。』

思ひ返してこんなことを宥めるやうに源氏の君は云ふのであつた。

翌日源氏の君から來た手紙の返事に、

承り候、ここちあしく候へば御返事もいたしがたく候。

とこれだけを瑠璃樣の書いて遣したのを見て、腹を立てたやうなこんなことを書く人であるから、戀をしても仕がひがあると源氏の君は例の惡い癖でさう思つて居た。